やまさき文化

'92-2＊No.11

山崎町文化連盟

〝やまさき文化第十一号〟発刊に当って

山崎文化連盟会長　壺　阪　　壽

ある地域が文化活動を活発にするか、しないかには色々な方法手段があると思われます。

その一つの方法として、機関誌を発刊するということがあることは、いうまでもないことです。

然し乍ら、その機関誌を続けてゆくということは仲々大変なことです。例えば投稿していただく方々がなければどうすることも出来ませんし、又原稿が集まったとしても、多くの町民の皆様に読んでいただきやすく編集するのも色々と苦心のあることです。

そういった障害はありますが、幸いにして、山崎文化連盟の発刊する〝やまさき文化〟が続いてまいりましたのは、編集に携わって下さる委員の方々の御努力は申す迄もありませんが、此の小冊子を育ててやろうとの町民の皆様方の暖かいお気持ではないかと思います。

その様な皆様のお気持にも応え、又一方では、山崎町という地域の文化活動の一層盛んになる一助に、此の機関誌がお役に立つように、従来にも増して内容の充実に努めなければと考える次第であります。

これからも〝やまさき文化〟が多くの町民の皆様に広く読まれる事を切望しまして〝やまさき文化第十一号〟発刊の辞にさせていただきます。

◇目　次◇

やまさき文化第十一号発刊に当って　壺阪　壽　2
クルディスタンの思い出　安井　道夫　3
科学技術におけるコミュニケーションと言葉　前田　浩　13
故郷の記憶から　植木　行宣　14
壺阪山崎町文化連盟会長の叙勲を祝して　福山　清一　15
古式ゆかしい第七回薪能奉納　伊野　操治　15
短　歌　藤村　省三　16
俳　句　和田　疎人　18
熊谷守一という画家　福岡　久蔵　20
作家　吉川英治さんの碑文　藤村　清一　20
過密と過疎の変貌　堀口　春夫　21
そこに心あるならば　田内　宗代　21
踊りの道でボランティアを　藤村美代子　22
茶の湯　朱山　毅　22
観察会五十回目を終わって　井口　武一　23
尺八の起源と変遷　深瀬　巧　23
自然と共に生きている　中井てるお　24
宍粟郡の名の由来　小川　登　24
第六回ウォークラリー大会で　教育委員会　25
俳句を作る　後藤　一孝　25
将棋で集中力を　藤井　七代　26
'91合唱連盟だより　岸川　貞夫　26
音楽の夕べを催して　森本　一二　27
「囲碁」今昔有感　長川　耕一　28
事務局便り　荒木　俊介　28
編集後記　柳田　勝
表紙画／カット／表紙題字　尾崎　正一

クルディスタンの思い出

安井道夫

トルコの首都アンカラをたった飛行機が東に行くにしろ西に行くにしろ、機上からの景観としては、ただ単調な黒々としたステップ地帯ばかりを眺めることになる。

快晴の続く夏季ならば、うっすらとした砂塵が大地を覆い、変化のない起伏は、濃紺の膜を通してながめるほどに、やや霞んでいて一層荒涼たる感じを与えるのである。

私たちが、アンカラからトルコ東部（東部アナトリア）のワン市に向かったのは、一九八六年八月八日のことである。

ステップとはいえ、山襞の間には、濃淡のかたちが限り、ときには広大な耕地の幾何学模様が現われる。雨の季節に小麦の播種をするというが、その耕地の三割までは、三、四年周期の休閑地だとも聞いた。

草木のかげのない褐色の大地を、そこだけが青い大河が蛇行するかと思うと、今度は白く崩壊した断層の中を白濁した河が直線に近くどこまでも見通せるのである。

文明の母、チグリス、ユーフラテスの両河もここに源を発するという。

そうして、山が高く険しくなり、地肌の荒涼がなお一層増幅されたかと思ったとき、そんな褐色の世界の中に、突如として紺碧のワン湖が姿を見せはじめる。

湖面は場所により視角によって七色に変化すると言い伝えられているが、微細な砂塵を通して見るだけに、塩湖特有の重さまで感じられ、見る者に異様な緊張を強いてくるのである。

さすが、琵琶湖の六倍もあるというだけに、さまざまな形が湖面に延び、ときには重い塩水に両側から侵食されてやせ細ったかと思われる地形の岬。砂礫がつねに流れ込むのか、煙ったように白く長い直線の汀もある。

飛行機は、危険なほど湖面に近づき、水面すれすれに飛んでワン市に着いた。

これがクルディスタンへの第一歩であった。

クルディスタンとは、もちろん「クルド族の住む土地」の謂であるが、一方東部アナトリアのほとんどの土地は「アルメニア地方」と重なり合い、いまでは隣国ソ連の一共和国アルメニアに狭苦しく押し込められたアルメニア人の故地でもある。

いまでこそ辺境の地に成り下がっており、日本ではあまり馴染みではないが、この地はとくに東西文明の交点として、三千に余る関係国が存亡し、通過して行ったと言われる。ウラルトゥーとアッシリア、ギリシャとペルシャの角逐の後、アレクサンドロスの大遠征でその版図に入り、ローマ帝国、ビザンティン帝国の支配に続いては、ルーム・セルジュークやモンゴル族の侵入。その後はオスマン・トルコの最長の帝国が今世紀初頭まで続いていた。そのほか、インドラ、ヴァルナ、ミトラなどインドと共通の神々をもつミタンニ王国や、旧約聖書中にその名を留めるアシュケナズ、トガルマ、フルリ人、メディヤ帝国など挙げれば切りがなく、本職の歴史家にとっても未知の部分が多く、その複雑にもつれ合った歴史の糸をほぐしていくことは至難の業のようである。

またアルメニア地方の旧石器から新石器時代にかけての遺跡から発掘された黒曜石のナイフ、錐、鏃や刀剣類は、西アジアから地中海、ヨーロッパにかけても数多く発掘されており、その原石は、すべてアルメニア高原から供給されたもので、とくに西アジア農耕の発達に重要な役割を果たしたと言われている。

私たちが、ワンに着いてから数日の後のこと。トルコ・ブルーで彩色された美しい家並みをもつカルスの町から、東部最大の高原都市エルズルムに向かう峠の上で、黒曜石が露出した異様な断崖をみた。山を崩して採掘した跡であるが、下方に散乱したものだけでなく、無尽蔵に見える鉱脈もいまでは利用されることもないまま放置されているようであった。

アルメニア人は、キリキア・アルメニア王国の十三世紀まで幾度びかにわたり燦然たる輝きの王国を築き、人類の文化の面でもさまざまな遺産を残したのであるが、結果は少数民族の典型的な悲劇に見舞われ、彼らにとってのこの土地は怨嗟の思い出のみの場所となってしまった。ユダヤ民族に比べても、なおアルメニア人ほど恐ろしい歴史を荷なわされた民族は他にないと言われるのである。

私たちがワン市に着いて最初に訪れたのは湖面に浮かぶ小島アクダマルに残るアルメニア教会跡であった。九二一年の建立になるというが、イスラムの軍隊に損傷され

ることもなく、無傷のままの美しい姿を湖面に映し続けている。

その建物は、島の地肌と見分けがつかないほどの褐色の石灰岩で造られた小さなものであるが、紺碧の湖面に支えられ、それよりもいささか薄い紺碧の空に、均整のとれた端正な姿を突き出している。

その十角筒形のうえに円錐形の屋根を被せたドーム様式の尖塔は、外壁の浮彫とともに、当時のヨーロッパ世界に先鞭をつけたもので、アルメニア人の心の拠り所となっているだけに、驚嘆すべき技術の高さを十分示しているのである。

建物は、尖塔をもつ正方形の中心部から、放射プランによって長方形の構造物が十字形に突出している。そうして、近よれば、まず外壁のレリーフに圧倒されるのである。ブドウ唐草模様が、建物のやや上方を帯のように取り巻いて飾られ、その中にはさまざまな動物や、ブドウの採り入れにいそしむ人びとなど、聖書の中の場面が点綴されている。

他にバイブルを持った堂々たるキリスト、円で囲まれた聖人たちの上半身、帆を上げて航海する人たちの姿、大きな魚、半獣半魚の怪物など。またアルメニア教会の開祖とされるグレゴリウスなど。それらはすべて、建築資材としての正方形や矩形の石材に陽刻されたもので、深く彫り出されているだけに陰の部分も強く、鋭いノミのタッチが感じられるほど生き生きと伝わってくるのである。

裏に回れば、補修されたかと思われるほど出来の悪い浅い彫りもみられ、なぜかそういう像に限って顔が欠き落とされている。

アルメニア教会は、当時異端とされたキリスト単性論を奉じたため、他のキリスト教徒から大変嫌われ、ギリシャ正教徒とアルメニア人との反目が、アナトリア全域にわたるムスリムの大洪水を招き、ひいては一九世紀末からの数度にわたるアルメニア人大殺戮に連なったともおもわれるのである。

それにしても、これらの美しい建築群が、戦乱に明け暮れた時期に造営されたことは驚嘆に値することである。

またアルメニアは、紀元三〇〇年頃世界で最初にキリスト教を国教として取り入れた国家で、その自負心からかアルメニア教会をイエス＝キリスト自身によって創設されたとするだけでなく、その故地の中心に聳えるアララト山（五、一六五メートル）をノアの方舟が止まった聖地として喧伝しているのである。

当然、アルメニア人の祖は、ノアの息子ヤペテの子孫ハイークだとか、ノアの孫ゴメルの子孫だという伝承が生まれ、その建国神話には次のような話がある。

人類の傲りで建設されたバベルの塔が、神の怒りにふれて破壊されると、さまざまな言語を話す民族たちが混り合って争いをはじめるようになり、世界は大いなる混乱期に陥た。それを嫌ったハイークは、子供たちと三百人あまりの同族を連れて北に向かった。アッシリアでは、巨人ベルを破って、めったに人が入り込めない深い森の点在する山紫水明の土地を手に入れた。ところが、近隣の諸族は、いまだ略奪に明け暮れた生活をしていたので、ハイークの子孫アラムはクルド族の先祖とみなされるメディアを討って、新しい国を建てた。その国は、アラムにちなんでアルメニアと命名された、というのである。

さて、アルダマル教会当時の中世の都市の遺跡としては、カルスの東方五〇キロ、ソ連国境に接してアニの廃墟がある。

目的地の相当手前に、軍隊の検問所があり、カメラ、双眼鏡などすべて預けなければならない。持込みは禁止されているのである。

アニに着くと、頑丈な城塞が延々と続いていて、兵隊の案内役について中に入る。

城塞はもちろん、アニの都市を築いた「慈悲王」と呼ばれたバグラトゥニ王朝三代目のアショット（在位九五三―九七七）によって創建されたものであるが、この城塞が見つづけたこの都市の沿革をたどってみるだけでも、アルメニア史の一端に触れる思いがするはずである。この王朝の末期は、アルメニア人特有の商業的才能がもっとも発揮された時期で、その活動の範囲は、地中海沿岸の諸都市はもちろん、インドからギリシャにまで及んだのである。当然アショット三世のアニ、その弟王ムシェーグのカルスなどの都市には、各地からの交易品が溢れ、その繁栄は絶頂に達したのである。ところが十一世紀になると、再び勢力を盛り返してきたビザンティンの支配下に入り、その支配の失敗や、セルジューク・トルコの暴虐、その後のモンゴル、トルクメンの侵略にあい、人びとは一家をあげて国外に移住しはじめた。この都市はまたたく間に廃墟となり、いつしか忘れられた場所になっていた。それが、前世紀末からの発掘により、「カフカスのポンペイ」と言われるほどの美しい建築群を発見することができたのである。

門を入れば、もはや一木もなく、ただ草原となった広大な場所に、さすが十万の人口を擁し、「一、〇〇一の教会の都」と言われただけに、大聖堂や修道院の廃墟が点々

と残っていて、住居はほとんど瓦礫の山になり果てている。
建物のなかには、雷に打たれ、その真半分が崩壊した無惨なものなど、傷みの激しいものが多いが、救世主教会、聖母僧院、主教座大聖堂、アブガムレンツ・グレゴル教会などは、優美なアルメニア様式を残していて、当時の都市の繁栄のさまを思い起こさせてくれるのである。
地形は、城塞からアルパ川（アフリアン川）に向かってゆるやかな草地が下り、その小さな渓谷を挟んで向こう側にも同じ草原が広がっているが、そこはすでにソ連領アルメニア共和国で、監視塔がこちらを睨んでいる。
両手で望遠鏡のかたちを作って向こう側を眺めることすら危険だと注意を受けたが、そんな政治的緊張感よりも、この明るく美しすぎる風景は一体何だろうか。国がありながらこういうふうに人の姿が完全に失せてしまった例は世界でも例がないという。
この土地はもとウラルトゥーの領地で、BC六六五年騎馬民族スキタイの奇襲により滅亡するのであるが、ウラルトゥーとアルメニア人との関係はもう一つよく分かっていない。
私たちは、ワン滞在中に、ふたつのウラルトゥー遺跡を見学することができた。
一つは、市街地からもつねに見通せるほどの距離で、湖岸に近く裸山があり、その断崖の上にあるワン城である。
城は、それほど古く造られた感じでなく、中世の城塞を思わせる姿であるが、材料が石でなく日干煉瓦のため、上部にいくほど摩滅して崩壊が激しく、見る方角によっては異様な突起物の集合に見えたりする。
上に登ってから、廻り込むように石段を下りていくと、ウラルトゥーの墓室があり、いまでは龕を掘り込んだがらんとした二た間続きの部屋があるだけで、当時の情景を思い描く何ものもない。
ただ、その墓室の入口近い硬い岩壁に、楔形文字が鮮やかに残っている。この碑文については、ボリス・ビオロフスキー、加藤九祚訳『埋もれた古代王国―幻の国ウラルトゥーを探る』（岩波書店　一九八一・九刊）に詳しく紹介されている。
城跡から下方を眺めると、豊かな耕地が続き、一部ではまさに刈り入れのシーズンか、黄金色の区画の中では、点々と積まれた藁束が斜陽をうけて美しく輝いている。牛が家路に急いでいる様子。何十頭となく群れて道路の方へ流れてくる。

そうして、小川に沿って目を移していくと、ここでは珍しいほどの濃い緑の草に覆われた水場があって、真赤な服を着た女たちが、洗濯にいそしんでいる。
洗濯の終った色とりどりの布は、道路わきの地面にそのまま広げられる。
子供たちもはしゃいで、走りまわっている。　ところが、絶壁の真下は植物のかげもなく荒涼として、赤く爛れた色彩の中に、不定形の水の流れた跡を思わせる線条がつき、雨期には湿地の様相を呈するに違いない。
そんな土地が、ただぼうぼうと拡がり、その中に、大小の石柱や古代の遺構を思わせる建造物が散在しているのである。
どこまでが史実で、どこからが単なる伝承かといえば、その判定は相当の困難が付きまとうわけだが、中世アルメニアの歴史家モフセス・ホレナッツイの歴史書に次のような記述があるという。
アルメニアの王アラに恋したアッシリアの女王セミラミスは、アラ王を生け捕りにして、思いを遂げようとしたが、その戦いの激しさにアラ王を誤って殺してしまう。女王はその死を悼み、恋人の霊を慰めるため、諸国を経巡って、ついに一つの塩湖の東岸に到達した。その断崖の東側が広い河谷になっていて、飲料水が岩の裂け目から溢れでているのを認め、ここに新しい都市建設を思いつくのである。
女王はアッシリアとシリアの従属国から、一二万人の一般労働者、そのほか木工、石工、金属工などの技術者六、〇〇〇人を引き連れ、数年後には銅製の門を持ち、強力な城壁に囲まれた見事な都市を建設した。
建物は、二階、三階建でバルコニー付き。市の中央にはプールを設置したり、川を引き入れて公園や花壇の灌漑もした。また、郊外には葡萄園や樹林を経営し、多くの人たちをこの都市に移住させた。あたかも、近代都市の建設をほうふつさせるもので、当時の人々は想像することも、記述することもできない驚嘆すべきものであった、と著者は言うのである。それは神秘的で恐るべき王宮で、あらゆる王宮のうちでも比べるもののないものであったとも、付け加えている。
ここでは、ウラルトゥーとアルメニアが同一視されているのである。
女王セミラミス（シャルム・アマト）は、BC八二五年から一二年にかけてのアッシリアを支配した実在の人物で、当時のウラルトゥーでは、第三代のイシュプイニ王の時代に当たり、この物語をウラルトゥーの首都トゥシェパの建設にまつわる話としてみれば、貴重な資料ともなりうるのである。

ウラルトゥーの国力は、前八世紀初頭に高揚し、アッシリアの力と拮抗したばかりでなく、ときにはアッシリアをしのぎオリエント諸国の中でも主導的地位を占めていた。

楔形文字資料からは、奴隷制国家といわれたウラルトゥーの戦いの激しさ、アッシリアに決してひけをとらないほどの残酷さがうかがえ、また都市の様子、神々の名前が記録されていて、先の伝承がまんざら虚構とばかり言えないのである。

このワン城を中心とする古代都市トゥシェパには、長さ七〇キロ以上の大運河が建設されていて、この都市に飲料水を供給していた。いまも、「シャミラム運河」の名をとどめ、一部はそのまま利用されているという。

戦いの様子は、サルドゥル二世（BC七六〇－七三〇）の年代記に記されている通り、征服地では村々を焼き払うばかりでなく、果樹園や耕地までも徹底的に破壊し、荒廃させた。そんな征服地も己の領土として取り入れたのである。

たとえば、エリアフの国（ザカフカス、アララト山北方の地）への三度目の遠征について次のように記録している。「……そして男女をビアイナ（首都）へ追い立て、要塞をつくり、その国を予の国に合わせた。偉大なハルディ神の名においてサルドゥルは言う。そこで予は捕虜をとらえた。男六、四三六人を捕え、女一万五、五五三人を追い立てた。計二万一、九八九人である。このうち一部は殺し、一部は生きたままつれ帰った。また馬一、六一三頭、駱駝一一五頭、牛一万六、五二九頭、羊三万七、六八五頭を追いたてた」と。

領土をめぐるアッシリアとの確執ばかりでなく、このように家畜の豊かな山岳地方への略奪を目的とする遠征についても記述されている。

ところが、そんな国力も、この王限りでだんだんと衰退に向かい、次の代には首都をトゥシェパからもっと北方に移さざるを得なくなる。今度は、アッシリアの粘土板の楔形文字資料に、ウラルトゥーの無惨な敗北のさまが、詳細を極めて記録されることになるのである。

さて、現在のワン市の印象としては、それほど街中を歩きまわる時間がなく、ばく然とした印象しか残っていない。ひとり、ホテルの前の広い道路を横切って小さなモスクのある小道に入ったところ、私がカメラを下げているものだから、付近にいた子供二、三人が物珍しげについて来る。手に持った棒で地面をたたきながら、「イングリッシュ！　イングリッシュ！」と、半分はやし立てるようにして付きまとう。

困ったものだと思ったが、ひどく長い時間一緒に歩いてしまった記憶がある。

屋上で夕食をとっているとき、急にぐらぐらと大きな地震がきた。ちょうど鳩ぐらいの鳥が四、五羽も居ただろうか、一瞬どこからか飛んできてテーブルの下へ逃げこんだ。それが、地震と同時であったか、ほんの少し早かったか、こちらも驚いていただけに気付かずに過ぎてしまった。

ワン博物館というのにも行った。ウラルトゥーの遺物を主とした小ぢんまりした好感のもてる展示であった。それが果たしてここに展示されていたものか、あるいはアンカラ国立考古博物館のものか詳らかでないが、「ウラルトゥーの大鍋」という三脚の上に載った銅製の鍋は、把っ手代りに四方に雄牛の頭部を配して、圧倒的な量感で迫ってきた。その他、青銅製コップ、銀製水さし、長靴形の土器、末端に獅子頭部をかたどった腕輪などの装身具のかずかず。

そうして二つ目の遺跡は、ワンから二三キロ。ハッキャリへ行く途中のチョウシュテペである。車でその山の鞍部に到達すると遺跡は見上げる両側の山に分かれて存在する。ただし、礼拝所のあったと思しい左側の山には、石垣ばかりが残り、もはや建物の原形をとどめず、あちこちに意味もなく大小の石ばかりが散乱している。

もう一方には、もっと複雑な遺構が残っており、発掘調査も緒に着いたばかりか、写真撮影も禁止とのこと。ここもトゥシェパと同時代の建造であるらしく、研いた石の特別の石積みなど、インカの石垣を思い起こさせるほどの精巧さでいまだに少しの狂いもない。

黒く炭化した穀粒。葡萄酒を蓄えた甕など。ただ、その表層を見るだけでも、相当高度の文明であったことは納得できる。ここでも驚いたのは、この高い山上へ、揚水していたという水道施設で、その遺物を直接見せつけられても、にわかに信じきれないほどの技術をもっていたのである。

山上から下方をみれば、一方は砂漠地形でかなたの山も道路わきの平地も、ただ一色の灰色の世界である。そうして、反対側には別世界の緑の耕地が見渡せる。その農地の灌漑が、いまだにウラルトゥーの施設に負っているという話である。

アナトリアのほとんどの農耕が、天水農業であると聞けば驚きは増すばかりである。

そうしてウラルトゥーといえば、いまでは石工と葡萄酒製造の技術を持ち出さねばならなくなる。

現在のアルメニア共和国の首都エレバンに、ウラルトゥーの都市遺跡カルミル・ブルルがあって、その発掘はさまざまな成果をもたらした。建物の構造からその各部屋の用途、残存する遺物からは農耕の様式やパンなど食物の種類、さまざまな日用品からは生活用式まで推論できるまでになった。

ここで特筆すべきことは、内城に葡萄酒用の八つの倉庫があり、その土間には、七万リットルの容量をもつ大甕が総計で四〇〇個も埋め込まれていたという。これは一、〇〇〇人の兵士に、毎日半リットルずつを一年間続けて飲ませることができるだけの量であったというのである。

ヘロドトス『歴史』は、アルメニア人と葡萄酒に関する記事を残している。それはアルメニア商人の活躍の一点景に過ぎないにしても、アルメニア人がウラルトゥーの文化の承継者であることを証拠だてる何よりの根拠ともなりそうである。

アルメニア商人は、ティグリス、ユーフラテス両河の水運を利用した。船は船尾も船首もないもので、なかには藁をいっぱい敷き詰めて積み荷を保護したのであるが、積み荷のほとんどは葡萄酒であった。葡萄酒は赤粘土の壺に入っている。

商人たちは、バビロンに着くと積み荷だけでなく、中に乗せた驢馬も藁も、船体まで売り払ったというのである。

さて話題をもとに戻して、国を失って以来のアルメニアは、トルコ族とペルシャ王国の狭間にあって、その紛争の都度多くの犠牲者を出したばかりでなく、さまざまな階層や地域に分裂したアルメニア人同士がお互い憎み合い殺し合うという運命を背負わされてしまったのである。

アルメニアの故地は、すでにかつての文明国の面影もなく、クルド族など遊牧の民が定着のため入り込み、ムスリムの中の孤立したキリスト教徒としてのあらゆる辛酸を舐めるわけである。

しかし、一八世紀初頭よりのロシアの南下政策は、「アルメニア問題」をより一層悪化させ、その当時から弱体化したオスマン・トルコとペルシャの上に力をつけてきた西欧列強が頻繁に顔を覗かせるようになる。そこにはあけすけな国家利益というものが見え透いて、これが近代というものの特徴かと理解できる。もちろん古代からの国家意思というものは、同じ権力意思に支配された残忍なものであっただろうが、ここへ来て突然、それが見え透くだけに余計に卑俗な様相を呈してくるように思われるのである。

そういう情勢に呼応するかのように、一八七七年の露土戦争を契機としてアルメニア人の民族意識が一挙に高揚してきた。ところが、それはロシア、トルコの両当事国だけでなく、外国勢力からもいよいよ疎遠にされる結果になり、ついに一八九四年から九六年にかけて、トルコによるアルメニア人の大虐殺の発生をみるのである。

それはトルコ皇帝アブドゥル・ハミトにより、「イスラム教への脅威」を大義名分として行われた。クルド族からの度重なる蜂起で悩まされ続けていたのを逆に利用して、クルドを己の軍隊の中に吸収し、皇帝の名をとって「ハミディエ軍」と呼ばれる騎兵隊を創設、それにアルメニア人部落をつぎつぎと襲撃させたのである。

アルメニア人とクルド族が共存する東部アナトリアの状況は、すでにアニの繁栄の頃から紛争が絶えず、ここにきて政治的支えと軍事的援助を受けたクルドたちは、トルコ軍隊とともに、たとえばムシュ地方のサスーンの事件など、後世に名を残すほどの傍若無人の残虐をほしいままにした。

しかし、事件は一時国際的にも問題になり、調査団派遣も行われながら、トルコ政府の正式見解、「クルド族とアルメニア人の衝突による、些細な偶発事」として、簡単に片付けられてしまったのである。

それが、ほとんど狂気の伝搬として東部の都市全域にまで及びその犠牲者の数は、五万とも十万とも言われている。その襲撃についての計画性は、まずラッパの合図ではじまり、アルメニア人殺戮がなにより優先し、その後に略奪が続くという決まったパターンにより確証されているのである。

この暴動はイスタンブールにも波及し、生き残ったアルメニア人は土地を失い法律上の保証もないまま、またしても国外脱出を図らざるを得なかった。

疑心暗鬼のヨーロッパ各国は、善悪何事によらず、お互いが牽制し合って、現実はアルメニア問題についても何一つはっきりした統一意見を出さないまま、ただ傍観を続けていたのである。

ところが今度はトルコにおける民族主義の高揚、すなわち「汎イスラム主義から汎トルコ主義へ」の大きな傾斜があって皇帝は追放される。そうして、その傾向が暴走するに及んで狂信的な状況を生み出し、ひいては政治的内乱を将来したのである。

その混乱は、第一次、第二次のバルカン戦争に発展していった。弱体化したオスマン・トルコからの独立を宣言する各地の民族主義の反抗であった。

一九一四年、第一次世界大戦がはじまり、トルコはドイツ、オーストリア側について参戦した。そうして、またしても戦時をぬってこの時期に、百万単位のアルメニア人の大虐殺が発生したのである。

ただし、これは前回の虐殺の恐ろしさとはまた違ったジェノサイドというにふさわしく、国家による周到な計画のもとに執り行われた民族撲滅の先駆けとなった事件である。事実一つひとつを検証することは、ただ身の毛だつばかりで、ひとのこころにこれほどの冷酷さが潜んでいようとは、いかなる物語もイマジネーションにおいて到達できなかった領域である。これが、たがが外れた二十世紀の特徴で、すでに神が死に物語が死んだと言われる所以でもある。

それにもかかわらず、現在に至るまで政治的反応はまったく鈍く、そのこと自体がまた今世紀を特徴づける事件であったと言えるのである。

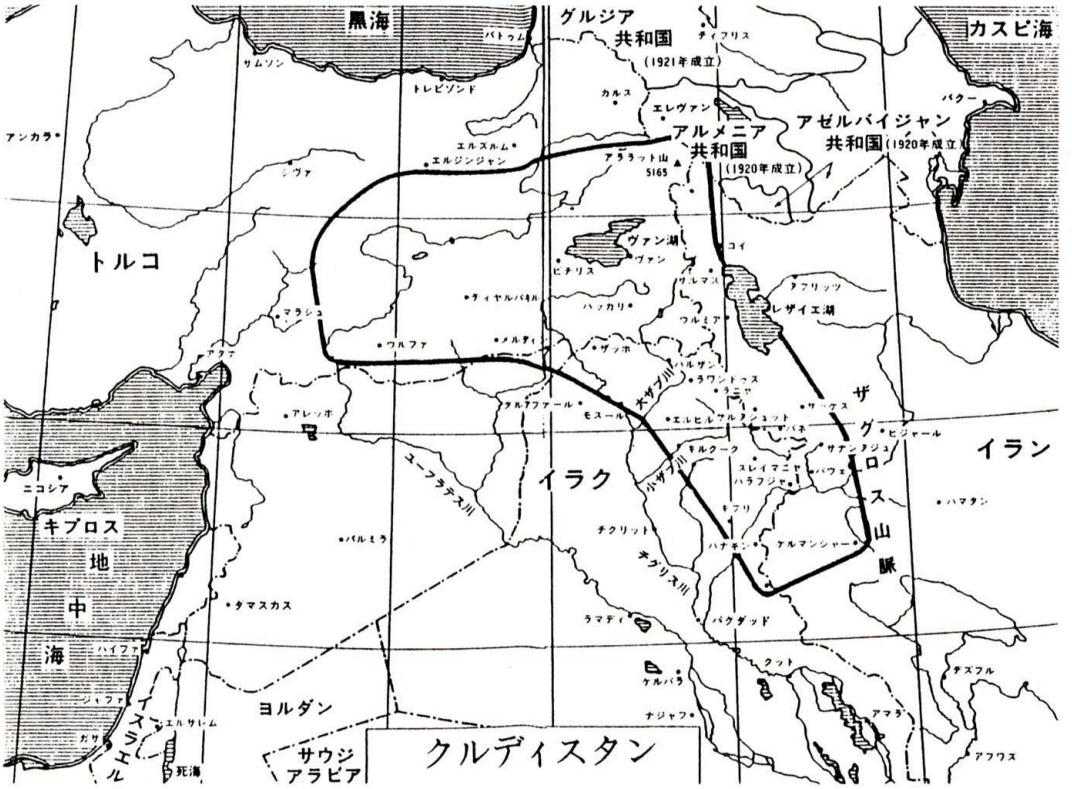
事件は、一九一五年二月、アルメニア人武装解除の布告より始まった。

まず軍隊の中のアルメニア人は戦闘部隊から外されて、道路工夫か、奴隷のような荷物運びとなり、銃剣に脅かされながらカフカスの山々へ追放された。トルコ人たちが行き倒れの彼らを撃ち殺すことは平気で、一般的な慣例とさえなっていたようである。

そうして、市民の非武装化のための武器捜索は一段と厳しく、割り当て予定に達しないとてトルコ人から武器を買って提出したものなど、武器所持者はすべて反逆の罪を被せられて虐殺されたのである。

女、子供に対しては、戦時のことでもあり、貴重な武器を使用せず、国外追放の名目で暑熱のシリア砂漠とメソポタミヤ峡谷への死の行進を強要した。

その行進中、憲兵の黙認のもとに農民暴徒やクルド族、チェッティス（公立刑務所から募られた強盗団）など、その集団に対して思いのままに振る舞うことができたのである。憲兵については、「……犠牲者たちに対する残虐行為は、犠牲者たちの肉体的苦痛が激しくなるにつれてひどくなった。憲兵たちはその任務を早急に終わらせたがっていたようである。遅れた女たちは路上で銃剣で突き殺されたり、断崖や橋から押し落とされた。河、特にユーフラテス河を通過することは、いつも大量殺害の機会であった。……彼らを苦しめる者たちの欲情と貪慾には限りがなかった。最後まで生き残った者たちはしばしば、よろめきながら裸でアレッポに着いた。彼らの衣服の糸の一本まですべて途中で引きちぎられていた。彼らの到達を目撃した者たちの述べ



るところによれば、その中の一人として若くきれいな顔は見られず、本当の年寄りも間違いなく一人も生存していなかった」と、述べられている。

このように国外追放とは、ジェノサイドの口実で、殺戮のための新しい方法にすぎなかった。

ゆえにトルコ国家による国外追放令は、アルメニア民族全体に対する死亡通知書と同意語であったと言われる。虐殺前、トルコには約二〇〇万人のアルメニア人がいて、うち一〇〇万人かそれ以上が虐殺と国外追放で消えていったのである。

そうしてこの国家がらみの行為に対する正当な判断は非常に難しく、トルコ人自身にはそれほどの罪意識はなく、かえってもっとも忠実な伴侶の顔を面に表わしながら、敵国ロシアと通謀してトルコを分割しようとした張本人として非難するだろう。

確かにトルコにとっては、国家存亡をかけた異常な事態の中の出来事ではあったのである。

ただ、今度はクルド族との関係で、もっと複雑怪奇な状態が存在するのである。

さて、その時ワンの街はどのような状態であっただろうか。当時、トルコ人とクルド族を合わせたよりも、アルメニア人たちの人口比が多く、場所が国境に近いだけにトルコ政府にとっては、いち早くアルメニア人を排除すべき場所であった。

ところが、二、五〇〇人ほどの犠牲者が出たところへ、ロシア軍の進出があり、その占領によってアルメニア人は虐殺を免れたのである。

私たちはワンを後にして、イラク国境に近いクルドの街ハッキャリへ向かった。

出発の前日まで、行けるものかどうか、山岳クルド族反乱の噂もあったりして、少々心配したが、とくに禁止されるようなこともなかったようである。

車の窓外には晴れわたった紺碧の天空とはまったく対照的な褐色の大地が、どこまでも広がっている。ゆるやかな起伏は、珍しく耕地になっていて、刈り入れがすんだばかりか、いまだ黄金色の筋がかすかな孤を描いて幾筋も延びている。かなたにトラックが一台、麦束を積んでいたりする。

そのほか、何もない。ネギ坊主のような花、ときには大きなアザミなどが目立つだけで、ほとんど草のない砂漠地形ばかりである。

しばらくすると、向こうの山の稜線が煙ってきて、ちょうど飛行機から見たような霞んだ光景になってしまう。山の色も大地の色も、非常に変化に富んでいて、褐色の表皮をはぎ取ったような灰白色、黒曜石を思わせる黒々とした山肌、微細にひかり輝く砂粒の山など、ほとんど乾燥しきった草地があれば、必ず羊が群れている。

そのうち私たちは、ホシャップの城に着いた。

現在に残る城跡は、一六四三年オスマン配下のマムディ族の首領サル・シュレイマンにより築城されたと言われているが、当時のスルタンはムラト四世の死後跡をついだ弟イブラヒム一世であった。このスルタンは、折角兄が再建した帝国を退廃させただけの無能者で、在位六年にして要人たちに暗殺されてしまう。

ただ、この地はイランへ続く要衝の地であるだけに、古くウラルトゥー時代から要塞として利用されていたようで、あのシャミラム運河もここまで延びていたのである。

さて、ホシャップ城は、見る場所によってまったく別の相貌で現れる。一番城らしくまとまって見えるのは、ようやくその城を目にすることができた丘の上から、やや俯瞰するのが最上で、そこからは川を挟んで生える貴重な緑の樹木の上に、灰褐色のゆるやかな山並みをバックに凝集されたかたちをみせるのである。

近よれば、上部を崩壊させた城壁が長々と続き、裏に回ればこれまたインド・ラジャスタンあたりの城かと思うほど、城門も含めて大小の円筒状に取り囲まれている。

背後の山には、恐竜の背中かと見紛うほどの突起をもった城壁が、ちょうど万里の長城のようにくねくねと続き、窪地に点在する民家や荒廃した遺構を取り巻いている。

村の入口に水場があって、女たちが集まって洗濯をしていた。カメラを向けると、意外なほど激しく拳を振り上げて抗議する。私は、その激しさに圧倒され、民家を撮影しただけで早々に引き上げてしまった。

城に対して道路側には、チャイハネ（茶屋）と食料品の店があって、男たちがたむろしている。大人は男たちばかりで、チャイハネの前の日陰でお茶を飲みながら、呑気そうに話し込んでいる。子供たちの顔を見ると、人種的には相当に混血が進んでいるようで、目の大きな金髪、茶色の髪、茶色の目の女の子など。男の子は、黒髪、黒髪で縮れ毛の子、茶色の髪の子は白い肌でいくらか彫りの深い顔立ちをしている。

そのとき子供たちから聞いた話では、学校ではトルコ語を強要されているが、家に帰ればほとんどクルド語ばかりの生活で、年寄りにはトルコ語をいまだ解せないものもあるという。

クルド語は、ペルシャ語、パローチ語などと同じイラン語系に属するもので、イランがアーリヤ（語原「よそ者を大切にする」）に由来することからも、クルドはもっ

ともアーリヤ的な民族といわれる。

ところが、現在のトルコ政府の正式見解では、「トルコ国民はすべてトルコ人であり、トルコ人の言語はトルコ語以外にはない。トルコ語以外の言語はトルコ国内に存在しない」、ことになっている。

そのためクルド語に限らないが、少数民族の言語はトルコ国内では読み書き、話すことを固く禁じられていて、ここからも難問山積の「クルド問題」のさまざまな拡がりが確認できるのである。それは一国の内政問題などではなく、たとえばイラン・イラク戦争の遠因がクルド問題であるように、「中東問題」を理解するときも、それを無視しては正当な判断などできないほどの問題なのである。

トルコ政府は、クルドに対して「山岳トルコ人」という苦しい命名を奉り、ときにはその言葉の上に、「母国語を忘れた」という言葉を付け加えてまで、トルコ人の単一起源説に固執する。そのため、内外の文化人類学や言語学の学者にしても、クルド族について言及することは大変危険なことで、事実そういう危難にあった例は多い。ある社会学者など、東部アナトリア調査の末、クルド語は独自の言語であり、それを話すクルド族は独自の民族であるとの結論に達したため、官憲によって「国を売る」行為をしたとみなされ、未だに獄に繋がれているという。

ディヴィド・ホサム、護雅夫訳『トルコ人』（みすず書房　一九八三・一刊）にも次のような記事がある。「……事実、今日、トルコで「あからさまに言うこと」とは、普通、クルド人をクルド人と称することを意味する。共和国政権下では、クルド人の民族主義――どんな形態をとるにせよ――にたいする弾圧は徹底的で、それを口にしただけでも、誰であろうと「トルコ民族分裂主義者」とみなされる」と。

クルド族は、クルディスタンと呼ばれる地域に分散し、他民族と共存して住んでいるが、それはトルコ東南部。シリアの北部と東部国境地帯。イランのコルデスターン州、ケルマンシャー州周辺、イラク国境とトルコ国境付近。ソ連アルメニア共和国の首都エレバンとその付近である。

人口については、それぞれの国の政策による大量の強制移送、村落の破壊、そして今回の湾岸戦争で明るみに出された引き続く殺戮などによって、正確さを期待することはほとんど不可能である。ただ一、〇〇〇万人から二、五〇〇万人推定され、その半数がトルコ東部に集中して住んでいることは間違いないことである。

いくらか山のね高さも増してきて、谷川の端を通ったり、広い河原に接した草原が見え出すと、楊柳のような樹木に囲まれた人家や家畜の群れにしばしば出合うようになる。

次の休憩地はバシュカーレという町であった。バンを出てからの最初の町らしい町。そうはいっても賑やかなのはT字形のわずかな区画だけであるが、さまざまな商店が揃い、人々が溢れている。よほどトルコ・ブルーが好かれるのか、窓枠の柱も、扉も、シャッターも、食堂の板囲いも、いくらかの濃淡の差はあるにしても、ほとんど同系統の青で塗られている。途中の道路わきにあった蜜蜂の巣箱でさえ、全部が全部鮮やなブルーで統一されていた。

果物屋には、つるっと表皮のなめらかな西瓜、黄色に青の斑模様の入った瓜、ブドウ、リンゴ。野菜では、トマト、ササゲマメ、キュウリ、冬瓜など。

衣料は原色が多く、赤、黄、藍などがやはり好みとみえ、それらは強い陽光を受けガラス窓の外側に吊り下げられている。そのほか雑然とした自動車の修理屋。雑貨屋、荒物屋など、さすが交通の要衝となっているのか、この町には物が溢れ、活気に満ちているのである。

山岳部に近づくにつれて川の水量も増してきて、ときにはぽつんと小さな林が現れたりする。そうしていよいよ山岳部に入ると、その山容の厳しさは予想をはるかに超えたもので、なんとも形容しがたいほどの剥き出しの岩塊が、上からのしかかるほどの威圧感を与えるのである。

山の色は脱色されたかと思うほど白っぽく不気味に見え、垂直の断崖などいまたち切ったばかりの生々しさで黒い光沢を放っている。

小さな村の前で、何度目かの検閲があった。パスポートの呈示も必要である。

そうして禿山とは対照的に樹木に見え隠れする村を通過して、一段登ったところにハッキャリの町はあった。確かに山に囲まれた町である。

ゆるやかな坊主山もあるにはあるが、ホテルから見る目の前の山など奇怪なかたちに盛り上がり、この町に特別な気分を与えている。

二、三日前もクルド族のテロによる銃撃戦があったというが、いつ独立運動家たちが立ち現れても少しも不思議でないだけの地形、地物は揃っているのである。

しかし、山には隠れるべき樹木はない。これほどまでに多数のトルコ兵や警官が街中を右往左往して警戒するなかでは、白昼の襲撃は困難なことと思われる。

同行のSさんが、街路にたって、ただメモを取っていたというだけで連行され、釈放されるまでに長い時間がかかったことを思えば、相当に緊張状態が続いていることは納得できるのである。

ホテルの窓から眺める風景も珍しい。

どの家の屋根にも四角な煙突が出ているが、その一つ一つが屋根に比べて不釣り合いに大きく、小さな屋根にも七本もの煙突がひしめき合っていたりする。共同住宅では、かたちは同じでも、大きなものが一つ二つ取りつけられているだけだが、冬場の冷え込みの厳しさを思わずにはいられないのである。

さすがクルド族のほとんどがスンナ派ムスリムというだけあって、すぐ近くにモスクがあり、美しいミナレットが山の稜線を超えて夕空に突きささっている。その下を真っ黒なチャドルを着た女がふたりこちらに向かって歩いてくる。

一方の窓からは、白壁の長屋風な建物が続いているが、それが相当痛んでいてなかには窓ガラスも壊れ、木製の梯子のような階段も二階の張り出しも崩壊寸前といった状態で、果たして使用されているものかどうか判明しないが、粗末なトタン葺屋根の上に真っ赤な唐辛子が干してあるのを見たりすると、ふと銃撃戦での損傷だろうかと、思いはあらぬ方向にいってしまうのである。

しかし路上で会う人たち、とくに子供たちは無邪気で、非常に明るい。街角の風景を撮ろうとすると、必ず子供たちばかりでなく、大人たちまで集まってきてすぐ記念撮影の体になってしまう。わいわい押し合い、ちょっとでも前へ出ようとする。

構図などかまっていたら、すぐにカメラの前は大きな顔で塞がれてしまう。

とくに女の子の服装は、派手で、色さまざまなワンピースの下に花柄のズボンをつけている。ハッキャリよりも奥の農村へ行ってみても、やはり色彩豊かで、きちっとした服装をしているのは驚きで、特筆すべきことであった。

夜、あらゆる集会が禁止されているというのに、同行の松原正毅先生の友人の計らいということで、地元の青年たちが特別に民族舞踊を見せてくれた。

星を仰ぎながら、夜道をぞろぞろと小学校の校舎まで歩いて行き、ほんの短い時間であったが、男三人に女二人が民族衣装をつけて、激しいクルド族の舞踊を踊ってくれた。

翌日、エレベーターのないホテルで、ひと苦労して荷物を出し終わったとき、後ろから私の肩をたたく者がいる。振り返ると、昨夜踊ってくれたうちの最年少、高校生のヤスミであった。昨夜は白の民族衣装に黒の房のついた布を首に巻付け、ふっくらとした顔立ちの彼女は成熟した女の姿であったが、今日見る姿は緑の服に白の吊りズボンをはいて、ひどく幼い感じであった。

彼女を含めて、昨夜の連中はバスが出るまで、人なつっこく待ってくれていた。

さて、クルド族のことが日本で一般に知られるようになったのは、湾岸戦争後の三月中頃からで、一時毎日のように新聞を賑わし、六月に入れば何ごともなかったように急に紙面から消えてしまった。

たとえば三月二十三日の紙面では、「米、クルド族と秘密接触」とあり、アメリカはイラク、フセイン大統領を打倒するという所期の目的達成のためクルド族反乱を側面から支援。国連から与えられた（これすら疑問であるが）権限を大きく逸脱して、イラク国土の一五％を占拠しただけでなく、駐留地区から一、五〇〇キロも離れた北部で、イラク機を撃墜するなどして抵抗勢力の士気を大いに高めた、とある。

そのため、反政府勢力と政府軍との攻防は熾烈をきわめ、二十六日にははやくも死者二万人を超えたと発表された。

ところがアメリカは、イラクの将来に対する明確なビジョンのないまま、期待したフセイン政権内部からのクーデターも望み薄になり、政府軍の巻き返しが優勢になるとみるや、突然掌を返したような政策変更を打ち出してくる。

反政府勢力からの支援要請を拒否し、「フセイン大統領を支えながら、死括の問題として鎮圧に全力を傾けざるを得ない」と、発表する始末。

それはアメリカが、反政府勢力により、イラク全土を掌握する可能性が極めて薄いと判断したからの変わり身の早さで、その理由づけは次のように述べられている。

一は、もう一つの反政府勢力であるシーア派の台頭は、アラブ穏健派諸国に脅威になること。もう一つ、クルド族の独立国家樹立は、一、〇〇〇万人以上のクルド族を抱えて、民族問題に神経過敏になっている隣国トルコにとって容認できないこと。以上のまったく身勝手といえば、これ以上身勝手はないと思われるほどの、ただ同盟諸国の思惑を裏切ってまで筋を通すほどのビジョンをはじめから持ち合わせていなかっただけのことである。

原告、元アメリカ司法長官ライゼム・クラーク、被告、アメリカ大統領ジョージ・ブッシュ『有罪――国際戦争犯罪法廷への告発状』（柏書房　一九九一・一〇刊）と

いう書物は、今回の湾岸戦争の一般に知られざる部分を照射して、ブッシュの戦争犯罪を告発したものだが、クルドについては次のような記事がある。

「ブッシュ大統領は、イラク政府に対して反乱するよう、シイト・ムスリムサンド・クルドを鼓舞し援助した。その結果、互いに相はむ暴力、国外流出、住居の喪失、飢餓、病気および数千人もの死が引き起こされた。反乱が失敗に終わると、アメリカは、権限もないのに、イラクの一部に侵攻してこれを占拠した」と。結局、クルド族の人びとを単なる「捨て駒」として利用したのである。もちろん死者の数は、なかなかこの程度のものですむはずはなかったのである。

新聞の紙面の記事を追ってみると、三月三十一日、政府軍によるキルクーク陥落。「クルド族と見ると、婦女子の別なく虐殺」、四〇〇人の女性、子供殺害。

四月一日、クルド族数十万北の山岳地帯へ脱出。クルド族の歴史の中で最大規模の脱出行。二日、反政府勢力「敗北宣言」。

三日、「クルド難民三〇〇万人に――飢え、寒さで死に直面」。トルコ国境に一〇万人以上のクルド族が脱出のため集まっているが、たどりついた雪の峠ではトルコ軍兵士が銃をつきつけて、流入阻止。それだけでなく、クルド・ゲリラの拠点とみなされた場所を攻撃。ゲリラ六十人以上を殺害。四日、トルコ国境閉鎖。

トルコ国境ではトルコ・クルドの住む東南部ハッキャリ県の山岳地帯を越えて約一万人が同県シェクルジャの街に流れ込んでおり、うち二、一〇〇人はイラク正規軍の脱走兵であるという。

五日、クルド族二〇〇万の悲惨に対し、「クルド族を見捨てた国連」。またBBC放送は、「今世紀最大の悲劇」として放映。「クルド救済国連決議」については、アメリカ、中国、ソ連が「内政不干渉」をタテに反対する。

トルコ国境沿いに、なお三〇万人。この地域は地理、気候の条件が険しく、これら三〇万人は放置されれば、大量の死者を出すことが確実。「厳寒の中はだし、与えるミルクもなく」、「赤ん坊五〇〇人死亡説も」と報道。

クルド難民キャンプルボでは、「飢え寒さ　絶望見た。標高二、〇〇〇メートル毎日数十人凍死」など。あげれば切りがないほどの悲惨さの報告であるが、クルド族がなぜこういう状況の中にあるのか、歴史的にもそれぞれの国家に対して執拗なまでの反抗をする根拠がどこにあるのか、紙面からは何も伝わってこないのである。

「トルコ内のクルド人難民キャンプは、そのまま放置すれば、クルド人の独立国になる恐れがある」、とのトルコ政府の説得に、アメリカは無邪気なほど素直に、「トルコの難民追い出し」に手を貸し、五月十日にはトラック三〇〇台でせっせと難民の大量送還を開始するのである。そうしてクルドの記事は紙面から消えていった。

しかし、トルコ政府はいまだにクルド・ゲリラの拠点となった山岳地帯を、「山賊掃討」の名目のもとに爆撃を続け、その根絶を狙っているのである。

今回の湾岸戦争でアメリカ政府がとった態度は、もうすでに幾度も繰り返され、ヨーロッパ諸国の植民地主義が世界の表舞台を賑わすようになってからは、常套手段といってもいいほどのパターンで、弱い立場のクルドにすればいくら裏切られても、力に頼るしかすべがなかったのである。

さかのぼれば、アルメニア人ほどの華やかさはないにしても、クルド族にはクルド族なりの歴史が残されている。あのアララト山麓ドウバヤジット郊外に、イシャク・パシャというすばらしい宮殿跡がある。これは、その要塞堅固の土地柄にもよるが、私にとってはもっとも印象深い建造物であった。

そうして、第二次大戦後の一九四六年になって、一度はイラン北西部に「クルド共和国」を樹立した。しかし、ソ連は石油利権にからむ取引材料として、この共和国を簡単に潰してしまったのである。

アメリカ一国をとってみても、石油利権のためにはまったく節操のない態度で、その友好国や援助国が猫の目のように変わった。すでに、CIAを通してクルドを援助し、ソ連寄りの国々を牽制する役割を押しつけた経験を持つのである。

この地域に大油田地帯さえなければ、クルド族にも平和が訪れていたに違いなく、物欲と合わさった国家エゴイズムに翻弄されることもなかったのである。

クルド難民の記事を見る度びに、ハッキャリの町のヤスミたちの安全が思いやられるのである。

（平成三年十二月五日　記）

科学技術におけるコミュニケーションと言葉

熊本大学医学部主任教授　前田　浩
山崎町川戸出身

現在の情報過多の時代における科学技術の国際間の情報伝達は、いかに行われているのであろうか。科学研究の最前線にいる研究者として、その一端を紹介したい。

まず、情報伝達の方法の第一は、国内外ともいわゆる学術雑誌であり、多くは学会誌であるが民間の出版社が出している雑誌も少なくない。また、いわゆる学会（多くは年次総会）やシンポジウムなどがその場を提供する。数年前に科学技術の情報量は、昭和二十年代の五百倍といわれたが、おそらく今日では千倍をはるかに越していると思われる。学会誌等の学術雑誌も益々増え続け、学会（日本癌学会とか、日本分子生物学会など）や、各種の研究会の数も年々多様化する学問領域とともに増え続け、医学関係などでは、学会のない週が無い程である。また、学会の他に種々の講演会なども毎日のように開催されている。

このように莫大な科学技術の情報は、コンピューターにキーワードや、著者名簿を英語でインプットすることによって、必要な論文の内容を瞬時に検索することもできる。それでもなお、その研究者と直接接触して得られる情報はベストであるが。

一方この情報量の増加に伴って発行される無数ともいえる学術雑誌を多くの大学図書館では、経済的な理由で買えなくなりつつあることも世界的な問題である。

さて、国際社会における情報交流で用いられる言葉はどうなっているであろうか？我々の関連している医学、生物学、生化学、生命科学の分野では、公用語は英語である。国際的な雑誌や集会は全て英語で行われ、ロシア人もハンガリー人もギリシア人もブラジル人も全て英語で行う。学会等でも全て発言は通訳はなく英語である。今から二十年ほどまえにヒューストンで行われた国際がん学会の折に、英語の他にスペイン語とフランス語への同時通訳があったが、イヤホーンにのみ流れる筈の通訳の音声が、スピーカーの方にも雑音として入ってきた。議長は、困って千人以上の聴衆に、スペイン語とフランス語を止めたいが、どなたかイヤホーンで通訳を聞いていますか、と尋ねたところ、イヤホーン使用者は一人もおらず、結局通訳は中止となり、英語のみで会議は支障なく進行した。このような国際会議では、当然のことながら、日本人であれ、中国人であれ、英語で発表する限り、その内容は、国際的に評価されるが、それ以外の言語では、認知されない。そこで総合的な英語の発表力（英会話と論述）が極めて重要となる訳である。勿論、その研究内容が何よりも重要であるが、共通の言語で発表しないとそれだけインパクトがないといえる。

過日、ドイツの比較文化学を研究している人に会った。その人によると、日本とドイツの小学校児童各々に、日常の会話における論理構築性、さらに、特定の事項を五点ほど与え、それに基き、一つのまとまった想像的な物語として、他人にどれほど話ができるかをテストした結果は、日本人児童が大きく出遅れていたという。それには色々な理由が考えられるが、ファミコンなどでの遊戯が多く、塾通いなどで子供が友達同志との会話をして、遊ぶ時間が少なく、また、学校等公の場でのスピーチの訓練が、欧米の学校よりはるかに少なく、ディベイティングなどの訓練が皆無であることが挙げられよう。また、儒教的な我国社会における「沈黙は金、雄弁は銀」などの社会的な背景もあろう。

過日機中で隣席したハイテク企業の中堅エンジニア氏は、最近の新入社員の表現力の低下と消極化を指摘されていたが、それは何も企業のみの現象ではなく、大学研究室でも全く同じことを感じている此頃である。

何れにしろ、国際化時代、多くの日本人は英語によって、どれほど外国人を説得できるであろうか。文部省の語学教育はこれでよいのだろうか。国際化社会においては、もはや以心伝心という言葉は存在しない。

故郷の記憶から

京都府文化財保護課　植木行宣
山崎町紺屋町出身

先般、調べものがあって能楽観世流の会誌『観世』をのぞいたら、「山崎八幡神社薪能」の文字が目にとびこんだ。

薪能は奈良・興福寺の修二会にともなう年中行事である。その篝火のもとで能を演じるあり方がこのところちょっとしたブームをよんで、雰囲気だけの「薪能」が各地に流行している。それには、町起し村起しの期待もかかっているようだ。そうした薪能について意見はいろいろあるとしても、古典芸能が地域振興に寄与するわけであり、能楽にとっても意義のある催しといえよう。いつか機会を得て、八幡神社のあの能舞台でじっくり見たいものである。

それはともかく、この記事が目についた途端、あの能舞台をめぐってつぎつぎと故郷の記憶がよみがえってきた。八幡さんの能舞台など意識した憶えはない。ましてそこでの能演など、そんなこともあったかなと思うばかりである。その能舞台が堂々とした姿で目に浮かんだのである。しかもそれは全体ではなく、まず高かった舞台の床、その床によじ登ろうとする手足の感触からはじまった。その感覚は、社前に並ばされ立ち眩みに必死に耐えた足元のぬかるみ飛び、ソリ遊びに興じた裏山の崖、カブト虫を探し求めたくぬぎの根っこ、そしてさらに紅葉山、最上山、一本松というふうに転々し、そのたたづまいとともにAちゃんBちゃんの顔や声が胸をふるわせた。まことに思いもかけぬことであり、しばし呆然としたことである。

故郷への思いは人それぞれであろう。そのさまざまな思いの底にも、こうした感覚的な記憶がひそんでいるに違いない。私にとってその記憶は、物心のついた幼い頃から遊びの中で身体に刻みつけられたものだ。それだけに、特に意識にのぼることもないのだが、このように思い出すとき、そのことを改めて考えさせられるのである。それは私が民俗にかかわる仕事をしているせいもあろう。たとえば、調査など古老の話しを聞くとき、私どもが意識せず理解する話を若い仲間はいちどそれを知識に翻訳して理解するところがある。その落差の目立つのが、実は自然やそれにかかわる事象なのである。それを私はひそかに皮膚感覚の欠如と称しているけれど、それこそは幼少年期に身につけるべきものであり、さきに述べた故郷の記憶はまさにその事例なのである。

私は、二人の子供を京都府大山崎町の新興団地で育てた。団地には地域の生活に欠けるところがある。それを煩わしいと思う人が多かったからであり、私自身も地域社会との付き合いがなくても痛痒を感じなかった。だが、子供たちが少し大きくなり、天王山に登るようになって愕然とする事態に行き当った。わが子らは崖道をよじ登る感覚に欠けていたのである。崖道をよじ登るのも学習が必要である。この岩は手がかり足がかりにできる。この草、この木は身を預けるに足る。ここは大きく迂回しないと駄目だ、などなど、やはり経験の蓄積がないと身につかない。いらい時間を見つけて山登りに連れ出したが、その成果は微々たるものに止まった。親がやれることはたかが知れているのである。事は山に止まらず、野に、川に、そして大きい自然へとそれは連続するであろう。思えば、私たち大人は遊びを通じ何時とはなしにそれを体得し、自然と付合う法を身につけたのである。故郷がその舞台であり、怖いけれど頼りにできるガキ大将率いるところの子供仲間がその師であった。ガキ大将が保持した危機管理の能力など今にして驚嘆すべきものがあるが、それこそは子供仲間が伝承した知恵に他ならなかった。団地の子らにはそれらがほとんど欠けていたのである。

こうしたことは、今や歴史ある地域においても普通のこととなっている。過日、亀岡市のある山間の町で「牛祭り」なる子供組の行事を調べた。その牛の神さんに供える魚は在所の川で獲るならわしで、瀬張りの網まで持出しての大層な魚獲りとなったが、ついに一匹も獲ることが出来なかった。田舎の子らもすでに川で遊ぶことをせず、したがってその生理にも縁遠くなっているのである。そのように、これらの文化の断絶はいまや日本の全土で進行しているのである。

わが国の伝統的な暮しの原理は自然とともに生きるところにあった。祖先たちは自然を知り、その知識を蓄積し、知恵を働かせてそこにこめられた価値を徹底的に生かしてきた。つまり自然に生かされてきたのだが、その文化を受け継ぐ場がこうして消えており、代って、自然を捩じ伏せ制御できるという知識偏重の生き方が大勢となっている。しかし、それは傲慢というものであろう。人間である限り、われわれの内なる生き物感覚に心をくばり、いまこそ自然と共生する道をもう一度ふり返るべき時であろう。わが故郷の記憶もそのころと深くつながっていることを思い知る昨今である。

壺阪山崎町文化連盟会長の叙勲を祝して

山崎町文化連盟副会長　福　山　清　一

山崎町文化連盟会長・壺阪壽氏が平成三年度秋の叙勲にあたり勲四等旭日小綬章を受けられたことを、私達文化連盟会員の皆様と共に心からお慶びを申し上げます。

叙勲の対象が地域産業の育成や小規模事業の振興に、私利を離れて専念され、地域社会経済・文化発展に大きく寄与され良き指導者であるとされています。

また兵庫県商工連合会会長・山崎町商工会会長をはじめ、同町の各種審議会長・金融・教育・交通機関・その他県・町での役職を歴任、これに付随した事業等にも多大の功績を残され、各関係機関からの表彰も二十八回に及び、その指導力・貢献度の偉大さが歴然としています。

山崎町文化連盟はじめ文化関係団体の現在の役職は左記の通りで、所属団体全会員の信任は厚く心強い指導者として活躍されています。

一、山崎町文化連盟会長　昭和五十七年五月から、同町内の文化団体、二〇団体が加盟。

二、西播磨文化協会運絡協議会長　平成二年五月から、所属参加団体、西播磨一円の三十三団体。

三、近畿文化団体協議会常任理事　平成三年五月から

四、宍粟郡文化協会連絡協議会長　平成三年五月から

主たる業績

一、昭和五十七年十二月、山崎闇斎三百年記念事業として山崎町文化連盟、同郷土研究会、同西鹿沢の有志に玉垣建立を呼びかけ、現在、有志の方々の氏名が玉垣となって山崎闇斎神社の尊厳さを増して同町の史跡の一つとなっている。

二、経緯度標設置　平成三年三月

山崎町文化連盟創立十五周年を記念して山崎文化会館の協力で同会館前に建立山崎町が経緯度のどの辺に位置しているかを皆さんに知ってもらいたいために設置した。

三、生沢朗画伯の遺作展　昭和六十年十一月、西兵庫信用金庫六階会議室で開催。

四、芸能祭　古典芸能を主として文化連盟会員が出演し、毎年春に行っている。今年は十三回目の芸能祭になるが、町民各位より大変な支援を得ている。

五、文化講演会

京都大学教授　清水大吉郎氏　昭和五十八年二月

京都大学教授　上山安敏氏　昭和六十年三月

香川大学教授　北川博敏氏　昭和六十一年十一月

熊本大学教授　前田　浩氏　昭和六十三年三月

作　　家　杜山　悠氏　昭和六十三年六月

上記各氏を講師に招いて開催。大学の教授はいずれも郷土出身者

その他、文化会館建設などにも大いに力をいれられた。

前会長庄静夫氏に続いて今回、壺阪会長が叙勲の栄に浴されたことは、吾々山崎町文化連盟会員にとっても大きな誇りであり、会員の皆様共ども慶びたいと思います。

古式ゆかしい第七回〝薪能〟奉納

山崎謡曲同好会　伊　野　操　治

隔年実施しております薪能を、九月二十一日、山崎八幡神社能舞台において、同好の皆様のご協力を得、奉納いたしました。

「能」〝経正〟を、大西師、指吸師、〝安達原〟を、藤井師、江崎師に。「狂言」〝瓜盗人〟を茂山師の諸先生方に演じていただきました。

初秋の一夜、約六百人の観賞者を幽玄の世界へ導き、「能」の優雅さと、心のやすらぎ、豊かさを味わっていただきました。

短歌

山崎歌人協会　藤村省三

山崎歌話会例会作品抄

稲村　幸子

披露宴の司会つとめて帰りたる子が默々と茶漬け食べをり
年齢をききおどろくふりも商ひの世辞と知りつつ買はされてをり
弁当もござも幹事に任せつつ花待つ老のこころをさなく
満開の花の下陰まぼろしに顕ちくる夫のあはれ杖曳く
首筋の疣ひとつ気になりだして法話の要聞きもらしたり

北川　智恵

厨にも居間にも挿しし蝋梅のこぼれしをわがふところに入るる
先生の意味を知らずに先生と呼ぶ幼子にかがまり応ふ
庭に鳴くうぐひすの声電話にて聞かせて嫁は息子と代る
向ひ家の庇の下に鳩一羽首すくめゐてさみだれ寒し
四度目はライスカレー屋になるといふ店直す音続きて暑し

藤原　すみ

寒の戻りの雪舞ふ町に求めたる青梗菜のすでに臺たつ
読む暇なかりし昨日の新聞を拡げて一人の昼のおだしき
火葬場の桜の老樹咲き満ちて死を美しきものに思はす
鳴りひびく雷に怯えて鳴く犬の声かき消してまたもとどろく
早贄のゐもりが枝にひからびて積もるともなき風花の舞ふ

松本寿賀子

蜥蜴らは光る尾先をちぢませて冬眠解かむ折を待てるや
屋内に温まりし水蛇口より流して朝のお茶の水汲む
袖たくし上げて老妻に拭かれをり腕に消残る刺青の青
博奕うちとよばれて皮を剥がれたる魚が悲しき貌に煮られぬ
「赤血球白血球」と鳩鳴きて病舎の軒にひと日雨降る

山崎きよ子

病む犬の小屋を覗きてひっそりと野良猫一つ過ぎてゆきたり
切口の白きを並べ埋めたる芋種この夜息づくらむか
引越しの度に疎みし亡き母の箪笥を撫づる暗き納戸に
生き別れ死に別れたる面影の重なりて見ゆ灯を消ししあと
てのひらの上に居眠る雛鶏のときによろめき脚踏み直す

藤村ふくよ

塀際に構へし猫の光る瞳を睨み返して背戸の戸を鎖す
行き行けどつづく裸木は唐松か牧水の歌ガイドが歌ふ
庭に摘みし山椒の芽を香にたたせ今年も和へる鳥賊と筍
母の日に贈りくれたるハイビスカスの朱咲きつぐと嫁に電話す
青と青うねり重なり寄る波のくだけて白く足元に散る　（白兎海岸）

青柳　良

眠られぬ夜を起きいでて厨辺に梅酒の瓶を音立てて出す
熱き茶を好みし亡夫に湯気立つを供へて独りの今日が始まる
しだり枝に小花真白きゆきやなぎ風にあかるき彩をこぼせり
梅漬の瓶の水位をたしかめてちぎりし柴蘇をひたすらに揉む
口小さき花瓶に活けし穂すすきの独りの部屋に細き影おく

栗山　節子

かりかりと歯を研ぐ鼠のゐる闇にサダムフセインの顔が浮び来
一撃に薪を割りたる魚屋のほころぶ顔に鱗がひかる
橋脚が今もまとへる洪水の芥に青く草萠えてをり
切り岸に枝垂るる白き山あぢさゐ登る岨路の数歩に匂ふ
珪肺を病みて骨立つ君の手に石刻み来し気骨のにじむ

森本萬千子

日帰りの旅にはあれど桜咲く日にこだはりて日取り決まらず
庭石の窪みは鳥の水浴場朽葉のぞきて水替へてやる
潜りゆく家鴨が水の青を蹴る黄の水掻きを躍らせながら
はじけつつ小さき種子が拡げゆく領域にしてかたばみ茂る
吹き荒るる風に揉まれし庭木木の痛みて青くあかとき匂ふ

安東はつ子

納品を急がされ包むくれなゐの牡丹模様の壺を賞でつつ
汗たりて摘む茶畑に一ひらの雲のおとせる影をすがしむ

荒びたる心に夕べ立つ厨剥くじゃが藷の皮厚くなる

間引き菜のか細き茎をひとつづつみどり児洗ふ如くに洗ふ

彼岸花父を焼きたる火の色に群り咲きて忌のめぐり来る

各地短歌祭入賞入選作品

◇神戸短歌祭

（四月二十九日・神戸市立婦人会館）

・入　選

庭石の苔に水打つ夫の顔われには見せぬ安らぎのあり　中田　博子

下校バスに居睡りてゐる学生の膝を漫画の本がずれ落つ　日下ふさゑ

◇第十回宍粟郡民短歌祭

（八月二十五日・千種町福祉センター）

・知事賞

牧場に走り出でたる母牛がつきくる仔牛を振り向きて待つ　中田　博子

・神戸新聞社賞

勝者の手素直に借りて立つ力士かなしきまでに幼顔せり　菅谷美津子

・千種町文化協会賞

相槌を打てば傷つくらむ友かストローの先の氷溶けゆく　森本萬千子

・千種町商工会賞

のびやかな脚伸べて座る少女汝いまだ火の如きかなしみ知らず　山崎きよ子

・宍粟郡歌人連盟賞

狙ひたる兎が耳を傾ぐるに引き金ひけぬとハンターのいふ　赤松　年重

大いなる平目沈めし水槽の酸素のあぶく呟きに似る　伊東まさ子

決断をせまらるることのある朝を苦きコーヒーひといきに飲む　小倉　法子

◇ふれあいの祭典短歌祭

（十月十三日・高砂市福祉保健センター）

・入　選

思ひっきり夫の帽子を蹴飛ばせば一人居の昼涼風通る　中田　博子

今しがた保津川下り来し舟が吊り上げられてトラックに乗る　武内　千鳥

嫁の干しし布団に残る日の匂ひほのぼのとして子の家に寝る　渡辺ちよの

◇西播磨短歌祭

（十一月十五日・西播磨文化会館）

・奨励賞

僕ちゃんとまた呼ばれしとしょげる子に赤きリボンをつけてやりたり　山田百合枝

華やかなる未来など無きわれと妻庭に並びて遠花火見る　北　隆治

出し置けるごみの袋に棄権せし娘の投票券が透けて見えをり　安東はつ子

溜池の水番帳にわれもまた指紋重ねて田の名を記す　安政　嘉子

面がひを付けたる仔牛繋がれて隣れる母牛に体すり寄す　中田　博子

手をあげて一人舗道を渡る児に車は長く列なりて待つ　小林　郁子

音たてて柿の若葉に降る雨を見てゐし犬が大き欠伸す　嶋津　三子

◇入選者の所属短歌会と結社

・山崎歌話会　山崎きよ子（綱　手）

赤松　年重（形　成）

・かしわの短歌会

菅谷美津子（無　所　属）

・新樹短歌会　小倉　法子（国民文学）

森本萬千子（　同　）

安東はつ子（　同　）

中田　博子（　同　）

伊東まさ子（　同　）

渡辺ちよの（　同　）

安政　嘉子（　同　）

日下ふさゑ（短歌春秋）

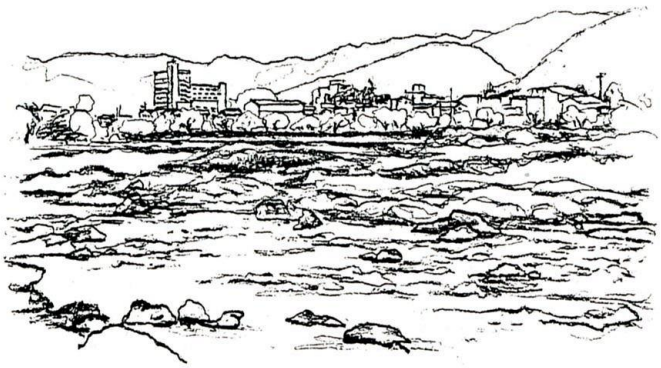
北　隆治（　同　）

山田百合枝（　同　）

小林　郁子（　同　）

嶋津　三子（　同　）

武内　千鳥（　同　）



『俳句』

山崎俳句協会　和田疎人

山脈句会詠草

瓜割れし生活の証野菜蒔く　尾崎すゞ子
万緑に抱かれたるごと羅漢仏　尾崎いつゑ
梅雨寒や懐炉入れたる我が齢　小倉つね
サーフィン木の葉に見える土用波　小倉れい
甲子園冷房の部屋共に沸く　垣口翔人
梅雨冷や一期一会の縁なりし　木村一子
白牡丹といえども赤き芽のいでし　小畑柏人
過疎の田を継ぐはどの子か青田吹く　小柴いく
春暁や今見し夢に未練あり　小島やよい
門灯に白鉄線の浮きいでて　高野薫風
草餅を父母への土産に夫と搗く　田中　恵
老二人ともに趣味もち梅雨籠　田中八重子
サロマ湖に浜なす咲いて音もなし　田村富美子
夏草や崩しまゝの窯の跡　牲川信子
紫陽花の色の変化や梅雨長し　姫野まさ子
泡沫の命いとしき蝉の殻　前野さつき
春の月したたるばかり昇りけり　土井　貞
亡兄の顔遠くうすれし原爆忌　宮馬幸子
草餅の匂い想いつ蓬摘む　山下房子
春焼や心急きつゝ旅仕度　山野源子
畑うてば蛙とび出し今日啓蟄　山田すま

☆☆☆☆☆

アイシャドー濃きも話題にビール酌む　和田疎人

さわらび句会詠草

墓のみの故郷となりぬ乱れ萩　薄木満寿恵
盆すぎて閑まる仏間一人座す　川崎栄子
汗の香も甘く帰省の孫抱けば　小林紫生
薄命の公達しのぶ花曇り　川崎栄子
暑に耐うも内なる阿修羅鎮まらず　壺阪加代子
舶子への字くの字を炙りけり　藤井七代
春の譜の生るる筧しずくより　本條淑子
名月や回転木馬の客となる　山中正子
コスモスやガイド親しき国訛　山岸園子

☆☆☆☆☆

町騒のとどかぬ苑や小鳥来る　和田疎人

青嶺句会詠草

蕗のとう地に胎動ある如し　芦田八重
薬草のほどよく乾き厄日無事　秋久光子
こゝからは母の在所や曼珠沙華　石野光栄
母にある天与のいのち返り花　大谷延子
畦道の刈られて広し在祭り　高野南嶺
露天湯に傘の用意や初時間　高野薫風
後戻り出来ぬ人の世夕端居　下村君子
過労死と云へ弔やそゞろ寒　杉本いし
雪解の大地は緩み空の蒼　田中良子
新緑のの弾ける光り玻璃戸拭く　友沢恭子
噴煙の濃き日淡き日島若葉　中野秋藻
百姓を継がぬ子ばかり遠蛙　永井とみ代
托鉢の衣軽やか今朝の秋　中尾悦生
稿進む雪解雫にせかされて　原田小次郎
返り花一つ囁く如く咲く　原田百合
流星を一瞬映し湖昏し　原田駆雲
アカシヤの吹けば異国に在りし日を　秦　千里
婚と葬こもごもありて春の逝く　春名寿美
息白く意志を曲げずに云い募る　福田泊水
水温む隠れ沼にも目ざむもの　藤家千代
夕映えの写る流れや溝凌へ　村元優子
溝凌ふ匂いふくみし風生まる　山口栄子
月の水少し乱して汲みにけり　山田東軒

☆☆☆☆☆☆

ちちろ澄む塾の子ら去りてより　和田疎人

青嶺句会席題（即吟）詠草集

陽の色を煮つめし黄色石蕗の花　芦田八重子
落葉踏む地の静寂に音かへし　〃
笹鳴きや茶毘の煙の真直ぐに　秋久光子
末枯れの小径の止まり悲恋塚　〃
冬うらら鶯張りと言う廊下　石野光栄
秋灯し孫への文の漢字殖ゆ　〃
サンマ焼く今が倖せかも知れず　大谷延子
晩酌の夫に老妻目刺やく　〃
福引や特賞なれど牛痩せて　高野薫風
時雨るるま宿名大書の傘の行く　〃
時雨早や移りて山の彩変えて　下村君子
共に老い共に励ましビール注ぐ　〃
一点の雲寄せつげず冬の月　田中良子
落葉掃くあとに落葉の舞いのあり　〃
目刺焼く生涯寡婦を貫きて　永井とみ代
外人の日本語上手浴衣着て　〃
灯下親し水割の色艶きめて　中尾悦生
廃坑に滴る音の冴ゆるなり　〃
獣園の河馬の大口冬ぬくし　原田小次郎
芽柳や園の木椅子のまちまちぬ　〃

足袋を履きつつも一事を決し兼ね　福田泊水
頑に拗ねいて独り炉に寄らず　〃
穂芒の風に上の香陶の里　秦　千里
柴は人恋ふ彩や実むらさき　〃
鰯雲看取り疲れの背を伸ばす　春名寿女
名月の出迎へ受けし無人駅　〃
つながれて目刺に自由なかりけり　藤家千代
吹く風のまゝに芽柳さからはず　〃
十薬のはびこりて友病みいたり　山口栄子
夫も娘も覗き込みたる初鏡　〃

☆☆☆☆☆

書架占むは俳書ばかりや福寿草　和田疎人
妻の眼を背に感じつゝ足袋を脱ぐ　〃

生野鉱山吟行

山崎俳句協会青嶺句会
石野光枝

四月十四日青嶺句会待望の吟行日。疎人先生を初めとする一行十三名は、少こし雲のかゝって来た空を心にかこつゝも春酣の播但路を一路北へと車を走らせた。四辺の景色にも目を楽しませながら生野鉱山へ着いたのは十時頃で案外近くなのに喜び合い、それでもさすが但馬に近いこの生野では櫻が満開で町の神社では櫻祭りも行われ何となく華いだ感じだった。

雲低く流れ生野路花ぐもり　千代
鉱山の悲話秘め里は櫻祭　いし

今は観光化され資料館休憩所おみやげ処等も整い、新しい建物は廃鉱のわびしさ哀れさと言うようなものはあまり感じられなかった。鉱の入口右側の崖なす山肌は被ふように日蔭つゝじが密生し白い清楚な花を一面に咲かせていた。

ひかげつゝじ坑夫弔らう供華の如　とみ代
銀山の歴史が息づくつゝじ山　栄子
銭沈む坑の祠や花の冷　光子

いよいよ鉱道へとは入って行くと足元はじめじめと水が流れ一瞬冷気が身に沁む思いであった。

廃鉱山の重き鉄扉や櫻冷え　小次郎
坑道に入れば花冷え忽に　泊水
今昔を語る坑道春寒し　君子

処々には昔の作業振りを人形に托して造り陽の目を見る事もなく働く坑夫達のその労苦が偲ばれて哀れを誘うものがあった。この裏手に拡がる古い開山当時の山を登って行くと堀って堀って堀りつくし廃山が奥へ奥へと続く、途中手子（坑夫）のひそかな願いを込めて刻った観音様と出会いその切なる願いも偲ばれ涙を催すものがあった。

廃坑の奈落覗くや木の芽坂　寿女
坑夫掘りし岩の線刻すみれ吹く　八重
手子の彫る仏像とかや春愁ふ　光栄
春蔭や太き根を抱く岩祠　南嶺
ストーブの温い資料館など一巡して生野荘へと急ぎ昼食を頂き投句。句会も順調に終り和気藹々のうちに次回の吟行を約しつゝ帰路についた。
春愁や花の宴の隅選ぶ　疎人
霧こめて山荘の視野開くなし　疎人
ひかげつゝじ今暖人形鉱を掘る　八重
そのかみの銀山哀史花の冷え　千体
岩に咲くひかげつゝじや過去かなし　南嶺
桜仰ぐ湿気敷多の坑出でて　小次郎
生野路の農家音なく葱畑　いし
廃坑に山神の留まりし菫草　光栄
散るさくら川の流れに沿うて散る　栄子

尚当月の高点句は次の通り

老鶯や哀史秘めたる手掘跡　泊水

参加者（アイウエオ順）

芦田八重　秋久光子　石野光栄
高野町嶺　下村君子　杉本いし
永井とみ代　原田小次郎　福田泊水
藤家千代　山口栄子　和田疎人

第十三回春の芸能祭ご案内

日　時　平成四年四月二十九日（祝）
午前十時半から午後四時まで
場　所　山崎文化会館
主　催　山崎文化会館・山崎町文化連盟
後　援　神戸新聞社・山崎町教育委員会

会員の日頃の練習の成果を、ぜひご観賞くださるよう、ご案内申しあげます。

参加部門
山崎詩舞道連盟
山崎謡曲同好会
山崎郷土芸能保存会
山崎邦楽邦舞研究会
さつき民踊グループ
（芸能祭実行委員会）

熊谷守一という画家

山崎美術協会
福岡久蔵

私はかって研究会冊子のあとがきに「熊谷守一さんの虫を見つめる目を、教師の子供を見る眼にもたなければ……」と書いたことがあります。それは教育現場から見た私の熊谷守一評であったのですが、私は限りなく彼に引きつけられるものを感じます。

生誕百十一年の今年、死後最大の回顧展が郷里の岐阜県立美術館を皮切りに、各地で開かれています。今、また熊谷守一なのです。

私など一度も出会ったこともないのに作品と共に興味深いものを感じます。それは私たちが日常生活の中で、全く見向きもしない事象に眼を注いだ画家だからかも知れません。例えば、蟻や蛙を、雨垂れが落ちるのを何日も、いや何カ月も見つめ続けたというのです。「蟻は左の二番目の足から歩きだすのだ」などは私にとっては考えられない話です。彼はそういう所に興味をおぼえたようですし、そういう中に不思議で豊かな表情を見出してもいたのでしょう。彼の生への絶対的な肯定は、名もない草花や小動物への限りない慈しみの視線となり、それが作品のベースにあるのだと思います。

日本の洋画界はヨーロッパやアメリカ絵画の影響を受け続けてきました。もっといえばヨーロッパから移入した絵画理論で武装した作品が街に溢れています。その中で彼はいつも自分自身であり続け、自分の感性に極力忠実に作風を展開させたのです。これほど実質で生きた人間も少ないのではないかと思います。

彼はリアリズムに出発し、日本フォーブ調も見せ、さらにマッス描法から輪郭線描をたどり、極度に簡約化された平たい色面構成の日本画風体に達しています。その風体もモチーフも日本風土的というか、俳句的というか正真の和風油彩の一形式を成就されたと私は思います。

日経新聞編集委員の瀧さんは、美術雑誌の中で「熊谷守一の何が魅力かと問われたら、第一に絵画と即答しにくい。絵画より書の方に魅力が映る。では、書かと再問されたら、書よりその人となりの方がもっと魅力だと答えない訳にはいかない」と言われています。私は絵であっても、書であっても、何であっても産み出された作品は産み出した人の生きようなのではないかと、ふと思い、熊谷守一さんのご冥福を祈るばかりです。

天下に三つしかない作家、吉川英治さんの碑文

新潮会
藤村清一

「新平家物語」「宮本武蔵」「私本太平記」「太閤記」など書いた偉大な作家吉川英治さんが遺した碑文は天下に三つしかない。その一つが、わがまち山崎町鹿沢の江戸時代の儒学者、山崎闇斎をまつる闇斎神社境内にある。

朝日新聞社論説主幹、出版局長、神戸新聞社顧問など歴任した社会評論家、故嘉治隆一さんから聞いた話だが、吉川さんの碑文の一つは神奈川県湯河原の竹内栖風画伯のために造られた筆塚に刻まれた一文。もう一つは、戦時中の疎開から、かなり長く腰を据え、東京都内に帰ってからも村の財政を助けるため本籍を置きっぱなしにしていた奥多摩青梅在の旧吉野村に残された碑文。そして第三のものが山崎闇斎神社境内に建立された碑石の文字である。

随分、前の話になるが、昭和三十五年秋のこと。新潮会が、いろいろ、お世話になっていた嘉治さんから分厚い便りが届いた。その内容は「たまたま、東京本郷の古書店へ出かけたとき、山崎町ゆかりの山崎闇斎先生の木像を見つけた。この像のことを作家の吉川英治先生に、お話ししたところ、私が購入して闇斎先生の古里へ贈りましょうと申し出て下さった。ちょうど吉川先生が文化勲章をお受けになったときで、木像の寄贈は受章記念にもなると言っておられる…」と、いうもの。まもなく嘉治さんの手によって闇斎の木像と吉川さん直筆の『奉献の辞』が山崎町にもたらされた。

昭和三十七年春、当時の村上彰治町長や新潮会員らが力を合わせて、大きな自然石に吉川さんの筆による『奉献の辞』を刻み込んだ石碑を闇斎神社境内に建立した。嘉治さん、吉川さん、新潮会員、町当局の善意による協力が、この貴重な碑をつくりあげたといえよう。

碑文は◇奉献の辞　所伝　本尊像ハ元伊藤仁斎先生ノ嫡孫　善韶號東所先生ノ愛蔵セラレシモノ也ト　畏友嘉治隆一氏偶々東都一書肆ノ書塵中ニ是ヲ発見　流転隔世遭遇唯ナラズトシテ　珍重収拾移シテ　山崎闇斎先生の郷土旧山水ノ裡ニ安カラシム　即チソノ芳施ノ寄縁ト郷人ノ景仰トニ随参シテ　茲ニ安座シ奉ルノ経路ヲ識ス　昭和三十五年十一月　文化の日、吉川英治書。

過密と過疎の変貌

郷土研究会
堀口春夫

昭和九年の秋東播平野で四師団と十師団が合同で陸軍大演習が実行された事があった。四師団の師団長は確か、寺内大将であったが、予備兵も復員召集され、学生も又、学校教練の為に参加した。非常時前の大演習であった。昭和天皇は其時、日岡神社の東端の丘陵から御観戦なされた。最終は東加古川と土山の間、今の稲美野で一大遭遇戦を展開する予定であった。当時の東播は全く人家の少ない大平野で、刈入れの終った平野は陸軍演習に持って来いの現場であった。加古川から土山まで新国道二号線が出来たばかりの時で、国道沿いには一軒も家が無かった。平岡村新在家が僅かに旧山陽道沿いに宿場町的に昔の名残を残していたにすぎない。大きな池が沢山あって、その間に森や林が点在していた。最近娘が東加古川に住む様になって、私は時々行くのであるが、全く昔の面影は見られなくなった。今は人口急増地として人家が密集し、バイパスがつき、ビルが建ち並び、国道も街並がとぎれなく続き、旧街道は町裏の露路の様な感じになっている。戦時中からぽつぽつ工場が出来かけ、新在家に東加古川の駅が出来、その昔SL車が黒い煙りをはいて田園の中を走っていた姿は何処にも見られない。駅前は大都市の如くビルが建ち、別府の多木肥料の煙突も見えなくなった。わずか半世紀余りですっかり変貌してしまった。大きな池も埋めたてられ、住宅や学校や公園が出来ている。わずかに木立にかこまれた玉蔵寺の甍と野口神社の森が昔の名残を語っている。人口急増と言えば、三田市も同じである、戦前は神戸電鉄の終点で六甲山系の裏に取り残された城下町と言うよりも鄙びた田舎町であったが、今は吃驚りする程都市化している。町に続く丘陵地に北摂ニュータウンが出来、ホロンピアー博覧会跡がフラワー公園になり周辺に高層マンションが櫛比して、スーパーや銀行のビジネス街も出来、名も神戸三田国際公園都市となりつつあり、ここに又、新しく人口が集中する。その半面裏日本の山村は過疎化し住民が高齢化して子供が少なく、学校を閉鎖する村もあると言う、憂うべき現象である。又古都京都では市内に高層ビルが計画されているが、古都の景観を害すると言う有様で市民は反対している。この様に急激な変貌の中にあって歴史と文化を守る事は又むずかしいものである。

「そこに心あるならば」

山崎茶華道協会
田内宗代

先日、岡山市の天満屋百貨店で、焼き締め陶公募展がありました。日本はもとより世界から公募された四百余点の中から、えりすぐれた作品百二点が入選展覧され、特別展として有名作家の作品も展示されました。会場に足を一歩踏み入れると、その作品からうける気迫に、まず圧倒されました。それは古典の研究を手がけた上、精進に精進を重ねた作家達が、自分の悟りを又、自分の主張を又、現代の世相を限られた一つの作品の中に表現しているさまは、まるで作家自身の魂にふれたと同様な感激をうけたからです。

又地元の姫路文学館でも、姫路城主である酒井宗雅展を拝見しました。十八才で城主となり、わずか三十六才の短い生涯を送った宗雅公が、いかに一城の主として、自分を高めるための修業をしたかを感じました。文化人として、芸術家として、又茶道人としての高度な知識は私達の想像を絶するものがあります。

松江城主である不昧公と云う良き茶の湯の師に出逢って、茶道の指導をうけ、城主としての心の交流を深めていった流れが思い返されます。参勤交代で江戸に上る旅先でも、竹を切って花入れを作り、野の花をいけて茶事を催し、花を愛で、一服のお茶で心をやわらげ、人との接点を茶の湯で求めて行ったのです。

宗雅公がせめて六十才までの生存だったら、播州の茶も変っていただろうと、その足跡が偲ばれてなりませんでした。

茶掛の軸に「喫茶去」と云う語があります。「一寸座ってお茶を飲んでいきませんか。」と声をかける。何ともさわやかで平(たい)なひびきではありませんか。この所作は四百年余以前の利休の時代から今日まで、何ら変ることなく続いております。

相手の心をくみとり一盌を点てる。茶室、道具組、季節感は相手を尊敬しその心の表現として準備するのでございます。御家元は、「一盌からピースフルネスを」というスローガンをかかげて、世界平和のためにお茶を実践されております。

お茶は堅苦しい、むずかしい、と云う既成概念を捨てて、それぞれの地域社会において、お茶の輪をひろげていただくと共に、私達もお茶を通して社会奉仕が出来たらと念じております。尚、九月十六日の普賢岳チャリティ観月茶会には、多数の方々の御協力をいただき、お蔭をもちまして、多額の義援金をすることが出来ました。会員一同厚く御礼申し上げます。

踊りの道をボランティアを

山崎さつき民踊グループ
藤村　美代子

幼い頃から、踊りがとても好きだった私。母に無理を言って三味線のお稽古をさせてもらったのは、確か小学五年生位の時だったと記憶して居ます。折角、母に無理を言って習い始めた三味線の「バチ」が小さな指に痛くて三日坊主で終わってしまいました。

それから幾十年……

昭和五十四年に『山崎さつき音頭』が出来、東京から踊りの先生が農協会館へ来られ踊りの指導をされました。多くの人々が参加され、私も参加して生来好きだった踊りが皆様と踊れてとても楽しく思いました。

出来得れば踊りの先生の元でお稽古がしたいと思って居りました所、誘って戴いて一宮の大谷先生に教えて戴く様になり、早くも十余年の年月が過ぎました。女ばかりの集まりで御座居ます。色々とありました。十余年の年月の内一人去り、二人去りと、今は本当に踊りの好きな人たちだけになりました。そのうち、大変悲しい事が御座居ました。私達の指導者の大谷先生が十月二十一日亡くなられたのです。まだまだこれからの人生でしたのに、とても残念でたまりません。

いつお会いしても、とても素適な笑顔で接して下さる先生でした。踊り上手な人、そうで無い人、色々とその人によって違う点もありましたが、でも先生は、どんな人にも平等に教えて下さる素晴らしい先生でした。もう、その先生の素適な笑顔も永久に見る事も出来ません。とても寂しい気持です。

この十余年間ボランティアの活動として、九月の敬老の日、老人センター、長水園、まどか園、白寿園などの皆様の前で私達の拙い踊りを見て頂き、道で出逢ったお年寄りの方々から『奇麗な踊りを見せてもらって有り難う』と言われると、とても嬉しい気持になります。

これからも、踊りを続けられる限り、ボランティア活動として皆様の前で好きな踊りを一生懸命自分なりに踊って、頑張りたいと思って居ます。

「茶の湯」

山崎茶道研修会
朱山　毅

茶において見出された新しい美は、「わび数奇」や「大井戸茶碗」にかぎらないが、たとえば茶碗のひびやゆがみとおなじように、「景色」と呼ばれる肌合いの模様がある。西欧の芸術運動、芸術思想（ダダとシュールレアリスム）よりも、数世紀も前にすでに美のなかにとりこめたことに驚きをいだかざるをえない。

茶室のはじまりは、床の間のついた書院建築の部屋を小型化したものであり、茶室は上層町衆の政治的な会合の場にもなり、数奇と現実とがかけ離れていないという贅沢さが茶の湯の普及に役立っていた。武士たちも書院座敷での茶の湯から小書院へ、草庵へと好みが「唐物数奇」から「倭物数奇」へと転換する時期とは重なっている

千利休は、津田宗及、今井宗久らと織田信長の茶頭となり、その後には豊臣秀吉の茶頭として、また秀吉のブレインの一人として政治力をもつほどに重用された。しかし天正十九年（一五九一）、その秀吉に切腹を命じられてしまう。

利休の茶室は四畳半は客二人、一畳半に客三人と主人、ともいっており、狭ければいっそう広くつかうという逆説を説いた。二畳の茶室は大阪城の「山里丸」のほかにもいくつかの記録がのこされている。しかし、この狭くて緊張感の強い求道的な茶室が、利休の没後ふたたび四畳半に戻る。

茶室の「にじり口」も利休の工夫であるといわれる。窓のような戸口は、川舟の船室に由来するとの説などがある。またこの戸口の型や角をとった床の間、壁にぬりこめられた柱、壁体の構造の木や竹をそのまま桟としてつかった窓などもふくめて朝鮮半島の民家づくりとの関連から説明可能との説がある。

茶室には武士も刀を携えず、丸腰で「にじり口」をくぐり入る。玄関がもともと出入りのチェック機構で、身をかがめて入る茶室の入口は、俗人にとっていかにも厳しい仕掛けである。それは現実世界から虚構の世界へ通じる門で、そこをぬければ身分、職業のちがいは問われず、主客対等で、しかも膝を接するばかりに親密に、あるいは緊張感をもって「一期一会」の茶の世界にひたることができる。

観察会五十回目を終わって

山崎植物同好会
井口武一

この会は久宗丑雄会長を中心に植物の好きでたまらない者、自然をこよなく愛する者の集う会である。

顧れば、この同好会が発足して以来、観察にずいぶん多くの土地を訪れたことになる。山崎の八幡神社の森を皮切りに岩上神社、瑠璃寺、安富町の加茂神社と、そしてこの九月の例会が出石のしちりき神社で五十回目。行ったことのある鎮守の森や音水渓谷、不動の滝、明延鉱山跡、峰山高原や氷の山、千種川の河川敷、揖保川岸と指折り数えると楽しい思い出が蘇る。この間、絶えず懇切丁寧に指導下さった昆虫館長の内海先生の他に、林業試験場の古池先生や鳥越先生、それに宍粟の植物研究の草分けともいえる建部先生がたにもお世話になった。先日行った十月の例会では姫路バンブー植物園で竹の研究で有名な室井博士のユーモアに富んだお話を聞き学職の深さにただ感服するのみであった。

さて、この機会に、これまで山崎町周辺で確認できた珍しいと思われる植物の名前を思い出すままに紹介しておこう。

ヤマトグサ・ミヤマセントウソウ・ナンゴクウラシマソウ・ナツエビネ・オオバノハチジョウシダ・イワヤシダ・ビロウドシダ・オオヒメワラビモドキ・キヨスミヒメワラビ・ヘラシダ（上の上）・カミガモシダ（生谷・杉ケ瀬）・イブキシダ・ヤノネシダ（宇野）・ムヨウラン（下牧谷）・キクガラクサ（神野）・カタクリ（小茅野）・ジュズネノキ（上比地）・コヤスノキ（城下、宇原）・チトセカズラ（大沢）・モリアザミ・サワアザミ（塩山）・ダケゼリ・イブキボウフウ（土万）など。

数年前まではあったが近頃見当たらない植物に、オキナグサ・キセワタ・フウランなどがある。自然淘汰ならいざ知らず人為的減少なのが残念だ。イワヒバやササユリ・エビネなどは採り過ぎだし、昔、牛馬の草刈場にあった植物も、杉や桧の植林で消えてしまったものもある。

でもまだこれから発見される植物もあるだろう。シモバシラ・ムラサキ・ヤシャゼンマイなどがそれである。観察会で思わぬ植物に遭遇することができるかもしれない。

だから、この植物同好会は会員それぞれが胸をわくわくさせながら集まってくる会だともいえる。

尺八の起源と変遷

邦楽・邦舞・小唄研究会
深瀬巧

尺八の起源は、エジプトと云われ、その材質は現在の竹ではなく芦の茎で作られ、歌口は斜角に切られており、長さも四尺余のものであったと伝えられる。次第に東に移り中央アジアから印度に入り、ここで始めて竹材を使用され、佛教の隆昌に従い更に中国に入り、独奏又は歌声などの「伴奏楽器」として「一越調」に合わせ「一尺八寸」とし「雅楽」に用いられるものと二つになった。唐の時代雅楽合奏に六孔の尺八を使用され、わが国へは奈良朝の時代に伝来する。また中国南方では五孔の尺八を「僧侶」の間で盛んに用い梵唄（ボンバイ）の律に合わせる為「印度音律」を使っていた。わが国へは平安時代に佛教と共に伝来する。世に「一節切尺八」と云う。鎌倉時代に「普化宗」の学僧が宗の国よりこの尺八を伝え足利時代の終わり頃から盛んになり織田信長の頃に「吹奏法」等に新境地を開いた為に、今まで僧侶だけが佛典に使っていた「虚無僧尺八」にも色々な影響があったが徳川幕府によって虚無僧に特権を与え種々保護を行った為に虚無僧尺八は益々盛んになり、「一節切尺八」は衰退していった。しかし幕末の頃になって虚無僧に不逞の行為が多くなり世間の非難的となった。明治四年に保護の特権を剥奪普化宗の廃止となった為「法器」であった尺八が一般の楽器として解放された。その後数多くの名手が出て本曲のみであった尺八楽を外曲と称する三弦や箏の曲と合奏する事となり尺八にも新しい境地と将来が開けてきた。その為には楽器そのものの調律に種々工夫をこらし楽譜にも新しい譜点法が用いられ、正しく伝承される様になった。平安時代に佛教を中心とした大陸文化の一部として伝来したが、しかし現在の尺八の直接の原形は同じく大陸から室町時代に伝来したもので江戸時代も中期になって根っ子の張った今のような尺八の形となったものである。尺八という楽器はその名を聞くだけで何か古めかしく人によってはついて行けない気がするかもしれませんが長い歴史を持ち自然の素材で作られたこの楽器は単純素朴に見えますが日本的なその音色、形を持っていて世界にも通じる楽しい楽器であります。現在尺八の種類は長さ一尺一寸から三尺三・四寸余のものもあり孔は「五孔」から「七孔」「九孔」等があり、その曲に合わせ選択することができます。本来の尺八本曲を始め箏曲・地唄・長唄はもとより民謡・詩吟・歌謡曲等、近年は洋楽器との合奏にも多く用いられている日本の楽器であります。

自然と共に生きている

播磨さつき会
中井　てるお

秋の取り入れが終わり三年ぶりに山に行って下草刈りをしながら大自然のはぐくみの偉大力に感心した。それは丁度十年前に植栽した桧が約三メートルの高さ、目通りで径五センチ。枝も行きかうまでに生長した。その間、年に一回夏に下刈りをするだけだ。手を休めて横を見るとそこには二〇年生の桧、五メートル平均八センチ。その下に三〇年生径一五センチ、二回目の枝打ち平均七メートルが終わっている。

こうして眺めていると人によっての力は何分の一か、微々たるものと感じざるを得ない。目下の田んぼを見ると晩い稲、又稲木架してある稲を見てもそうである。春、種まきをして半年足らずで一粒の実が一、〇〇〇粒に。これには人手と経費はかかるとは云え自然のすばらしい神秘である。これは一例だがこのような不思議な力によって人間が生きて、いや万物が助け合って生きているのです。

私は趣味で町花さつきを手掛けて三〇年、今ではさつきと話ができるような気がします。鉢の中で大自然の風雪に耐えて生きた風格をどのように表現するか先人たちの作品を手本にしながら楽しんでおります。

思うようにはなかなか作れませんが長いつき合いで感ずることは真心を持って四季折々の世話をすると必ず応えてくれる。手抜きをすると取り返しのつかない失敗にも。そうでなくても回復に二、三年はかかるのが常である。

ここで考えさせられるのは人の世の中、とくに近年物質的には恵まれて来たが心の豊かさでは皆の願いとは裏腹と言っても過言でない。自己中心的で思いやりの心とやらはどこへやらの感が強い。今大切なのは自然と共に生きて四季折々に人の心をなごませてくれる花（植物）の姿こそ私たちが見習うべきものがあると痛感しております。

人生五十年は昔のこと。今では百年時代も夢ではない。それぞれが豊かな心で、それぞれ個性に合った趣味を生かしての楽しい日暮らしが出来るよう心がけたいものです。

宍粟郡の名の由来

山崎詩舞道連盟
小川　登

宍粟郡は千数百年前伊和の大神が名命され、鹿沢城は宍粟城の意である。播磨国風土記に宍粟郡の名號は次のように記述されている。

宍禾郡

所以名宍禾者伊和ノ大神國作堅了以後堺此川谷尾巡行之時大ナル鹿出己ガ舌遇於矢田村。爾勅云。矢彼舌在者。故故號宍禾鹿村名號矢田村

続日本紀の元明天皇記に和銅六年五月甲子、畿内七道諸国の郡、郷名及産物等の由来を言上せよとの布令が出されている。この布令の前後に風土記は諸国の守介、掾、目等の手によって作られたものであるが、現在残っているのは常陸、播磨、出雲、肥前、豊後の五ケ国だけである。又、この時代に「国、郡、郷の名前は二字にせよ」と太政官の宣下がなされている。何れにしても、日本に文字が伝来して幾許も無い時代に、古老の言い伝えや、旧文、異事等を元に、それに然るべき文字をあてはめたのであるから、誤字、脱字、衍（字余り）等があっても仕方の無いことであり、理論の矛盾等は当然と申さねばなりません。

風土記の文意は、伊和大神が国造りを完成された後、山川谷尾の堺を巡行された時、大鹿に出遇われ、鹿は矢に舌を射られていたので、村名を矢田村とされ、鹿に遇われた地名を「宍禾」と號されたと書かれている。

宍粟の宍は肉の古字であり、鹿猪等の多い、宍粟郡は「肉多」なりと、栗田寛博士は和名抄（承平四年、九三四年ごろ、承久四年、一〇五〇年前、源順著）の註釈をしておられる。又、宍を穴、完等と書いているのは、何れも宍の誤りであると解明されています。

宍粟の粟に禾の字をあてはめているのは、禾が稲又は穀物の総稱であるからと思うが、禾にはクワの読はあるが、サワの読は無い。粟はゾク、ソク等、ソウに近い音読みを持つので、粟が正しいと考える。

以上の記述並に註解により、鹿沢は鹿沢で宍禾、宍粟と同じ同意語であることが容易に頷けることと思います。

第六回ウォークラリー大会で俳句をつくる

十一月十日(日)山崎町教育委員会と山崎町子ども会連絡協議会が主催し、文化連盟後援でウォークラリー大会が開催されました。小春日和の山崎のまちを千人に及ぶ参加者が地図を片手に約九キロメートルのコースを走破しました。

その中で、俳句協会からあらかじめ設定した季語「小春日」「コスモス」「落葉」「菊」をテーマに子ども達は、行く道々で感じたことを子どもらしい表現で俳句に表わしています。約三百点投句されたうちから俳句協会の皆様に選句いただいていますので、優秀な作品を紹介いたします。

一席
秋の山もみじの天井ひかってる
城下小二年　清水もと子

二席
落葉舞ういったいどこまで舞うのやら
山崎小五年　熊田雪絵

三席
コスモスが風にゆられておどってる
城下小二年　小川孝一

四席
友の声はずみ聞こゆる秋風に
山崎西中二年　水口裕子

五席
ひらひらと枯れた落葉がおどってる
城下小五年　仲川聖子

六席
たのしいね秋の落葉で面づくり
神野小三年　春名佑香

七席
秋かなし虫のなく声去ってゆく
城下小五年　増井新吾

八席
川にきて落葉水面にゆれている
土万小四年　春名太一

九席
くるくると足もとまわる落葉かな
戸原小四年　玉野美樹

十席
金色の公孫樹の舞いは冬告げし
山崎東中二年　小林恵美

将棋で集中力を！

将棋同好会
後藤一孝

毎年、山崎町では初夏のさつき祭と、秋季の十一月に将棋同好会の主催で、一般参加による将棋大会を開催しています。もう十五年以上も続いていますが、この大会では、町内の人たちはもとより、姫路市、相生市、竜野市、加西市などの遠方からも参加され、熱戦と交流が行われています。この大会の世話人の一人として常に感じることは、参加者の方々は将棋に対する愛着と、将棋を指すことに誇りを持っていることです。それぞれ個性があり、人間味のある方々であります。時がたつにつれ、参加者の顔ぶれも徐々に変ってきていますが、いつも真剣な勝負の観戦ができ有難く思っています。

将棋は元来、物静かに思索を練って戦う地味な個人競技であります。このことを象徴づけるひとつに、将棋の世界では控え目とも言える格言が残されています。例えば、「玉の早逃げ八手の得」、「桂の高跳び歩の餌じき」、「下段の香に力あり」、「攻める前に自陣の固め」、「取れる駒でもすぐ取るな」など他にも多く言われています。こうした格言をうまく戦いの中で使っていけば、自分の将棋が優位に展開されることに意義を持っています。このように将棋をさす場合、保守的な面、消極的な面があり、現代の少年や若者たちが好んでする競技とは縁のないものに映っているようです。

数年前から、山崎町教育委員会等の主催で「こどもチャレンジセミナー」が、毎年開催されていますが、将棋部門で小学生低学年、高学年、中学生としての参加があり、それぞれ個人戦が繰り広げられています。将棋の好きな子供たちがそれぞれ力を出し戦っているわけですが、その将棋に集中して指している様子を観戦するときはとても喜しいものです。特に、子供の将棋は経験年数により強弱はあるものの、将棋に対する集中力のある子供はやはり強い。また強くなると思います。次代を担うこの子供たちが、派手さのない、しかし集中力を必要とする地味な将棋の世界を通じて、自身の人生を如何に築き上げていくか、見守っていきたいものです。

山崎町では、将棋人口の高齢化が目立つ中で、今後は幅広い年齢層の将棋愛好者を集め、参加できる機会を提供することが課題となっています。最近、高校、中学に将棋部ができ、クラブ活動として熱心に育成している市町もあるようですが、山崎町も少年時代から育てる体制が必要となってきております。

'91 合唱連盟だより

山崎合唱連盟
藤井七代

一、八月二十四日　姫路文化センターでの「西播磨ふれあいフェスティバル」は子供からお年寄り迄、ふれあい、共に歌う楽しいイベントで、地域在住の音楽団体の集いです。コーラス団も身障、高令、外国人、女性、児童と多種多様です。それをうけ今回、一宮、安富の方々にも呼びかけ宍粟連合コーラスとして参加。

メインのゲスト歌手はNHKでお馴染みの田中星児、開幕は壇上に各市各町の旗が林立し代表者が並列され壮観でした。

わが山崎町旗と共に田口助役のお顔も見えました。その内の一人、千種町教育長と歌手とのハプニングなジェスチャーゲームに万場大爆笑で盛り上りました。

時代衣裳を纏い西播磨各地を川柳で詠(うた)いあげる川柳パフォーマンスは興深いものでした。姫路在住外国人学生のラインダンスを交えたソングも大受けでした。

障害者の熱い合唱に万雷の拍手が贈られました。同時にロビーではふるさと市が開かれ各地の産物加工品が並び、福祉施設での手づくり作品バザー等々、安価で多彩な売場に人々が群がり大盛況、売手も買手も和やかに和気あいあいの雰囲気に包まれていました。その人込みの中で久々にろう唖の知人と出遇い、おぼつかぬ手話で近況を語りあえたりしました。

印象に残るふれあいの祭典でした。

二、十月十六日　山崎文化会館での戦没者追悼式後のアトラクションに出演させて頂きました。日頃薄れていた戦時の記憶が胸をよぎり、身の引き締まる思いを覚えたのは私のみでしょうか。戦没者の御両親も逝去されたり、御高令になられたのだろうな！とふと思われました。

三、十二月一日　姫路パルナソスホールでの「ふるさとの心をうたう西播磨音楽祭」導入はホールのパイプオルガン。

敬虔な響きに心打たれました。久々に混声合唱として出場。練習時間も余裕なく当日、出場者も減り一抹の翳りもありましたが曲はディズニー「ジッパディドゥダー」!!　小鳥が啼き光溢れる素晴しいワンダフルディ!!　明るい曲想のままに従う事にしました。次々流れくるハーモニーに耳を傾けつつ、明日の為、よき勉強をさせて頂いた事でした。

最後の神戸大学のオーケストラ演奏と共に大合唱で幕が閉じられました。

音楽のタベを催して

昭和会
岸川貞夫

日頃山崎町の文化向上に私達も目立たない乍らも努力を続けています。

お互いのごく自然な集いの中で時機に応じた課題を追求していこうとの友が相集いあってから三十五年になります。その間、色々な事業もして来ましたが今年は三十五周年を記念して、何か山崎町の方々に心の安らぎをと考えておりましたところ、たまたま会員の中に神戸女学院大学音楽部講師をしておられる新田英明先生を存じあげていた者がいて、先生に相談しましたところ、新田先生のスエーデンの友人で、音楽家のご両親のもとで、幼少よりピアノは勿論、ビオラ、トランペット、トロンボーンをこなし、作曲もされ、又ピアノ伴奏者として過去二度も来日され、現在ヨーロッパ各地で活躍されてる方が丁度新田先生のもとへ来日されることをお聞きして、是非山崎へお迎えしたいとお願いしましたところ、心よくお引受けいただき本年六月に山崎文化会館に於て、お二人のバリトン独唱&ピアノの夕べを開くことが出来ました。

山崎町民の方々は云うまでもなく遠く他市町村よりお集り下さり音楽の夕べを心いくまで楽しんでいただき、大変好評を得ましたことは既に御承知のことと思います。

その節大変御協力下さいましたことを、この場をおかりして会員一同深く御礼申し上げます。

その音楽会でピアノ伴奏下さったスエーデンのオット・フロイデンタール氏が此の片田舎の山崎町を非常に気に入られ、後に山崎町で結婚式を挙げたいと云われ、平成四年六月頃フィアンセと共々来崎され願寿寺に於いて藤井慧乗氏のもとで日本式のしかも仏式で結婚式を挙げられるそうです。

ここに山崎文化のささやかながら国際的な面をついでに紹介しておきます。又、このようなことは大変喜こばしいことで私達会員は今から祝福を祈って出来ればその機会に又本年の様な音楽の夕べを皆さんに楽しんでいただけたらいいな……と思っております。

「囲碁」今昔有感

山崎囲碁同好会
森本一二

懐昔

昔は縁台のある家が多かった。田植えがすんで、野休み頃になると、門先に将棋盤を持ち出す。日が西に沈む頃になると、近所の年寄が集って、ヘボ将棋を始める。子供達もその端を借って、振り駒双六や挟み将棋を始める。すると、少し大きい子がやって来て、本将棋をするからと、チビどもを追っ払って、年寄の真似をする。この様にして、小学校も高学年になると、男の子は駒の進め方を覚えたものである。

それが扇風機が出来ると、門先の縁台が消え、夕涼みの老幼の集いも見なくなった。更に、テレビが入ると、夜遊びもなくなり、今はもう、本将棋を知っている子は、殆んどいない。

昔は学校や役場には必ず宿直があった。広い舎屋に一人で寝るのは心地よいものではない。だから、連れを誘って碁を打ち、睡くなるのを待つのである。だから、五十を過ぎた公務員で碁を知らない者は稀であるのと対称に今の若者で石を握った事のある者は、ごく少ないのではないだろうか。

昔の縁台では、将棋を知っていることが、仲間に入る一つの要件であり、宿直のある職場では碁を知らないと何か疎外感を持つ程の環境であり、この頃が、将棋や碁の最盛期であったと私は思っている。

現況

ゴルフ、カラオケ、パチンコと若者たちが走って行き、将棋や囲碁人口の減少、老令化は、淋しいことであるが、一方、私は、誇りをもって皆さんに語りかけたい。

〝山崎の碁、宍粟の碁は、健在だ。すばらしいんだ〟と

山崎に関西棋院の支部が出来て十余年、着々と実績を伸ばし機関誌「囲碁関西」の購読数は、日本一であるという。故なるかな。昨年は支部長高野圭介氏が普及功労賞を全国で唯一人受けられたのである。

又、全国青年囲碁大会に優勝された片山、吉岡両君は、県大会でも活躍され、内にあっては、後進の指導碁、或は子供囲碁教室などを持たれて奮闘されています。

老練も気を吐かずにおれません。九月二十二、三日両日第四回全国健康福祉祭が岩手県で行われ、その中「シルバー囲碁大会」で、見事選手権を獲得された高野圭介氏は、花巻温泉で全国の老猛者を相手に健闘されました。高野氏に続いて、今年も又、山崎町から選手権者を出しました。山崎町西鹿沢の田島靖三氏です。この方は、一昨年、東京から帰住された方で、往年の棋力を発揮されて、後進の指導に盡されている素晴らしい方です。来年の「シルバー大会」を期して待ちたいものです。

課題

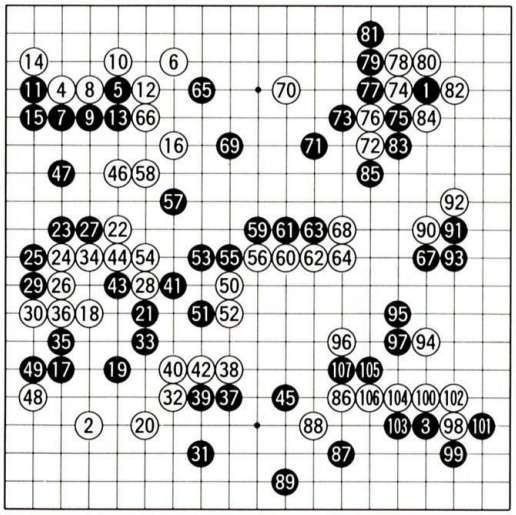
しかし、しかしです。ここ十年、多くの先達、同好者を失いました。春、秋の町の碁会にも若い人は少なく、集まる人も固定化し、減少しました。そこで、何とか同好者を開拓しようと「宍粟囲碁新聞」を発刊しました。幸い、今年の町文化祭協賛の碁会は、案内が広く届いたのか、常連に加え、級位の方々の参加がふえたのは近来の喜びです。

山崎町の人口は、二七、五七〇人です。女子の愛好者もふえてきましたのでその二%で五五〇名、三%で八〇〇名を超えます。これ等の人達が段級位に拘らず余暇を活用し、生涯楽しめる健全なスポーツを持つようになれば、なんと楽しいことではありませんか。

＊お好み対局＊

平成3年11月19日　於：高野圭介宅

手合割：互先（先番5目半コミ出し）
白　梶本寿算　　黒　森林滋治郎



107手完　　黒　中押勝

★事務局便り★

事務局長　長川耕一

宍粟郡文化協会連絡協議会が発足

かねてから要望のあった、郡内五町の文化協会、文化連盟が、相互の緊密な連携のもとに、文化活動の推進を図るため、平成三年六月二十五日、第一回の協議会を開き、文化祭、美術展、講演会、研修会等の、情報交換と地域文化の交流を目的とし、連絡協議会を設立いたしました。

役員は次の方がたです。

会　長　壺阪　壽　山崎町文化連盟会長
理　事　新土喜一　安富町文化協会長
〃　中村長吉　一宮町文化協会長
〃　岡田昇一　波賀町文化協会長
〃　奥田又二　千種町文化協会長
〃　長川耕一　山崎町文化連盟事務局長
事務担当　川畑信幸　安富町教育委員会
〃　上田　薫　一宮町文化協会事務局長
〃　上山　稔　波賀町教育委員会
〃　小林英一　千種町教育委員会
〃　大谷司郎　山崎町教育委員会
事務局　藤村清一　山崎町文化連盟

編集後記

編集長　荒木俊介

先ず初めに、本誌の中の福山副会長の祝辞にもありますように壺阪会長がこの度、勲四等旭日小綬章を受けられました。会員一同心よりお慶び申し上げます。

さて、「やまさき文化」も第十一号を重ねることになりました。文化連盟参加の各団体により、お寄せ頂いたエッセー、或は、お便りなど、盛り沢山の充実した内容に編集委員一同喜んでおりますと共に、その労苦に更めて、厚く、御礼申し上げます。

今回は、本号のトップを安井道夫氏の中東紀行「クルディスタンの思い出」で飾りました。この一連の紀行文で、いよいよ昏迷する民族問題の根の深さに少しでも蒙をひらいていただきたく思っています。

コラム欄には、前田浩、植木行宣の両先生の玉稿を頂きました。共に山崎町出身の方でございます。

又、本誌九、十号の表紙絵、カットを描かれて好評であった横野婦美子先生に代って、十一号を新進気鋭の柳田勝氏にお願いしました。

OA機器・事務用品・スチール家具
学校設備品・理化学機器・楽器
イトーオフィスサービス株式会社
（旧社名　伊藤文具）
代表取締役　伊藤　勉
山崎町中央商店街　TEL(0790)62−0126

創業明治28年・さつき本舗
四季の菓子
御進物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手づくりの御菓子を
御菓子司あらき
本　店：播州山崎町さつき通り　(電)62−0170
山田店：播州山崎町山田　(電)62−0160

飛石機械産業からのお願い

人が人として幸せになれる処方箋は何なのか、そのようなことを考え「幸福の泉」を生活信条に、自作自演で30数年を歩いて参りました。昭和46年、会社発足時に経営理念と改め、お客様のご信頼にお答えする為に、人としての使命感に燃え、それを無限のエネルギーとして全社揚げて取組んでおります。

当社では、企業は社会の公器でなければと申し上げており、流通の世界の中で生活文化の向上を願い、多目的に活躍しておりますので、尚一層のご支援をお願い申し上げます。

TOBIISHI

飛石機械産業株式会社
TOBIISHI KIKAI SANGYO CO.,LTD.
〒671-25 兵庫県宍粟郡一宮町山崎201-5 ☎(0790)62-1700

飛石機械 dept.
〒671-25 兵庫県宍粟郡一宮町山崎201-5 ☎(0790)62-1700

トビイシ住設 dept.
〒671-25 兵庫県宍粟郡一宮町千種110-1 ☎(0790)62-3610

CREATIVE dept.

for happy day happy life

飛石建機 dept.
飛石レンタリース山崎
〒671-25 兵庫県宍粟郡一宮町山崎201-4 ☎(0790)62-1703

飛石レンタリース姫路
〒670-0 兵庫県姫路市東延末2-5-1 ☎(0791)63-4022

飛石レンタリース姫路
〒670-0 姫路市南駅5-2-26 ☎(0792)32-5411

✦最新型カラー現像機導入✦
カラープリント・スピード仕上げ
良い品を・安く・安心して買える店

Specialty Camera Shop
コエエカメラ
宍粟郡山崎町東鹿沢26-3 ☎ 62-2089

料理旅館・割烹

創業
文久元年

菊水

兵庫県宍粟郡山崎町山崎287
TEL（0790）62-1119(代)

寿

幸せへの旅立ちに――。

ふじむら貸衣裳

宍粟郡山崎町山崎181 TEL (0790) 62-0052

＊安全で快適な生活をお届けする＊

共同石油株式会社特約店

株式會社 本條商店

社長 本條 衛

本社 兵庫県宍粟郡山崎町中井96 TEL (0790)62－4321(代)

清酒 山陽盃

ふるさとのお酒 確かな品質

サンヨウハイ

本醸造 しぼりたて 龍神

純米酒 きつき 一献

山陽盃酒造 TEL (0790) 62－1010(代)

登録商標 老松 スエヒロ オイマツ

キリンビール 特約店

しぼりたて 原酒

本醸造

兵庫県山崎町 老松酒造有限会社

地元にひろがる
心のふれあい —— にしん

西兵庫信用金庫

理事長 菅原 柾夫